あきらめてきた想いを叶えたい

～余命を楽しもう～

たなかひまわり

目次

あきらめてきた想いを叶えたい

http://p.booklog.jp/book/90920

１　余命宣告と秘めた決意
２　放射線治療とトキメク寄り道
３　大きな痙攣と男性的幻覚
４　抗がん剤と父の苦悩
５　蘇るパチスロッターと勝負の行方
６　寝たきり生活と父の意地
７　介護タクシーの秘技と高齢者団地
８　再入院と家族の穏やかな決意
９　在宅療養と父の笑顔
１０　デイ利用と素敵な出逢い
１１　父の異変と歌詞変更の危機
１２　嚥下障害と死を悟る父
１３　止まらない痙攣と最期の四日間
１４　旅立ちと火葬窯はラッキー７
１５　身内を亡くして思った事

著者：たなかひまわり
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tanahima2327/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/90920

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/90920

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ

２０１１年7月6日（1）

『只今、無事生還しましたよ。色々ありがとう。』

父が私に送って来たメールには、太陽の絵文字が踊っていた。

父、光信（みつのぶ）。享年七二歳。

群馬から上京し、印刷会社に就職。母とは職場結婚。家庭人、子煩悩で、娘の私が羨むほどのおしどり夫婦だった。

多趣味な面もあり、器用なので運動、文化とも手掛けたものはある程度の域までこなした。

スキーは独身時代。ボーリングはマイボール持参。結婚して草野球チームに入っていた頃は、幼い私を連れて練習に参加していた。その影響で小学生になった私はバッドとグローブを持ち歩く野球少女と化していた。

ゴルフは私が成人した頃。これはあまり練習していた様子が見られなかったので、父の腕前はいかに、だ。

晩年、父が手がけたプラモデルは圧巻である。

木製の五重塔や海賊船などを、一か月に少量ずつ届く材料で作った。

そのパーツは接着剤を付けて貼ればいいというものではない。薄くて細長い板切れを、ちょうどいい長さに切ったり削ったりしてから使う。それを何百と繰り返す。

手先の器用さは、定年後に就いた仕事でも生かされた。

住まいである団地のシルバー作業員として、公園の整備や団地内の草木の剪定、住民の方のお手伝いなどを行った。

そこで一緒に働いていた仲間と、飲みやカラオケなどと、集まっては楽しく過ごしていたようだ。

父の脳に病巣が見つかったのが年の初め。

過去、肺がんを患っていた父は、五年目の定期健診で『異常なし』との診断を受けた。医師に「肺から脳に転移することもあるので、念のために調べましょう」と言われ、検査したところ影が見つかった。

二月、診断を受けた大学病院ではなく、通いやすい近くの脳外科を紹介され、放射線治療を受けた。

父は重大なことほど一人娘の私には報告しない。この一大事を、離れて住む私には一言も告げなかった。母も同じだ。

私が離婚したばかりで頼りなかったというのもあるだろうが、そうではなかった時も事後報告が多かった。放射線治療の効果が見られず、六月、大学病院にて一回目の開頭手術に至ったのだが、これすら、手術前にたまたま私が連絡しなければ発覚しなかったことだ。

当時、中学二年生だった息子は、学校に行ったり行かなかったりと不登校を繰り返していた。

友達には恵まれていて、学校に行けば仲間の輪に入って楽しむ。宿泊学習などの行事には積極的に参加。家庭でも反抗しているわけではない。いじめなどに遭っているのなら無理はさせないが、とにかく登校しない理由がわからない。学校のカウンセリングルームには行きたがらないし、離婚した元夫もこの手の話を息子とすることができない。

そこで一番身近な男同士として、父に息子と話をしてもらおうと思ったのだ。

車で三十分のところに住んでいる父は、呼べばいつも孫会いたさに飛んでくる。それなのに、この日はなぜか電話の向こうで口籠っていた。

病院がどうたらこうたら。今ちょっと大変だから、落ち着いたら行くから、とか。

何か隠している。

そう思って問いただすと、「脳に腫瘍があって……」と打ち明けられた。

手術はこの二週間後だった。

２０１１年7月6日（２）

病巣は綺麗に取り去ることが出来たとのことで、麻痺などの後遺症もなく、元気に退院した。

シルバー作業員としての仕事は辞めたが、休みの日には車でパチスロに出掛けたり、朝夕の散歩に出掛けたりと、以前と変わらない生活に戻った。メールの文面通り、『無事生還』だ。

だが、このメールから一か月後、父に余命一年の宣告がくだった。

術後の検診で新たに腫瘍が見つかり、ベッドが空き次第手術ということで、八月中旬再手術を受けた。その際の病理検査による余命宣告だった。

手術に立ち会わなかった私は、それを母から伝え聞いた。

「コウ……なんとかっていうがんだって」

母のあやふやな記憶を責めても仕方がないので、私はネットで『脳腫瘍』を検索する。その中に『コウ』が付く病名が一つだけあった。

「もしかして、膠芽腫（こうがしゅ）？」

ビンゴ。

更にどんなものなのか調べると、脳腫瘍の一種で神経膠腫（グリオーマ）の中でも最も悪性度が高いとされる病気だと判明した。

五年生存率どころか、数か月単位で余命を宣告するがんらしい。

父が以前、肺がんを患ったのは脳腫瘍になる五年前、六六歳の時だ。幸い初期だった為、手術後に抗がん剤などの治療をしなくとも、予後が良好だった。

だが、私は身内にがん患者が出たということで、かなり強く衝撃を受けた。

がんというと、やはり『死』というイメージに直結する。治るがんも多い中とんでもない時代錯誤だが、ついそう考えてしまう。だから、「父が死んでしまうかもしれない」と、そんなことが頭を過り、血の気が引き、体が震えた。

[illegible]

　私はこの頃、両親に内緒にしておいたことがあった。ある文学賞を獲り、小説を出版したことだ。

　自分が創作したもの、まして書いているものが恋愛もの中心なので、親に読ませる事など小恥ずかしくてできない。子どもにも読まれたくないと思っている私は、受賞した事すら頑なに黙っていた。

　だが、自分の娘が世間的に珍しいことを成し遂げたと知れば、多少喜ばせることができるかもしれない。

　死ぬ前に伝えなければ……。

　そんな悲観的な見地で、私は両親に本と新聞の取材記事をおずおずと差し出した。案の定、両親は娘の思いがけない偉業に喜んだ。

　滅多に褒めない父が「すごいな」と、満足げな顔をした。

「中は絶対に読まないでね！」

　私は表紙だけ見せて、本を持ち帰った。

　読書好きの父が、娘の書いた本を読まない訳がない。すぐに近くの本屋で購入し、親戚や知り合いに自慢し切りだったようだ。

２０１１年7月6日（３）

　そんな経緯があったので、身内のがんを一度経験していた私は、今回の余命宣告をかなり冷静に受け止めていた。

　それに、七一歳でまだ若いとはいえ、母と海外旅行に行ったり、シルバー仲間と飲みに行ったり、休みの日には趣味のパチスロに出掛けたり、一人娘を嫁に出したり（出戻ったが）、可愛い孫も中学生となり、そろそろ祖父母離れしていたことからして、私は父に対して「生きていて一通りのことは楽しめたのではないか」と、考えていた。

　父がそれを聞いたら「勝手に諦めんな」と怒りそうだが、今の医学では三十年くらい治療実績の上がっていない病気だというのだから、どうしようもない。

　いかに長く生きるかではなく、いかに楽しく、限りある『生』を充実させるか。父の余命を前に、私はそう思った。

　母と相談の上、余命を父に告げることはなかった。

　この病気を患った方のブログや医療関係の記述をいくつか拝読して、病状の経過と現時点での治療の効果を知り、身体の自由が利く時間がそう長くはないと予測したからだ。

　父の性格上、余命を覚悟で来た時には、既に動けなくなってしまうかもしれない。

　もしかしたら、気丈に様々なことに挑んだかもしれないが、そうではなかった時に「言わなければ良かった」と悔やんでも遅い。

　父には絶望している時間がなかった。

　だから、自由に動けるうちに、大好きなパチスロもタバコもお酒も、存分に楽しんでもらおうと思った。つまり、病気の為にこれまでの生活を『制限する事を止めた』のだ。

　父から「体に悪いのに、どうして禁止されないんだ？」と、問われないことを祈りつつ。

　同時に私の中に一つのテーマが出来上がった。

　父と余命を楽しもう。

消えゆく命を前にして、『楽しむ』などという言葉は不謹慎かもしれない。が、悲観していても仕方がない。絶望している時間がないのは家族も一緒だった。

私は仕事と中学へ通う子ども達との生活があるので、通い介護を選んだ。無理は極力しない。体力的に実家に通える範囲で通う。精神的余裕を保って家族に接するためだ。

私は疲れている上に無理して動いた時、とやかく言われると非常に苛立つ。他人に対してだったら抑えも利くが、親となると感情がストレートに表に出る。

だが、今度ばかりは「疲れてるのに」という言い訳をしたくなかった。介護の場面からすっかり離れられる人間がいた方が、共倒れしにくいだろうというのもあった。

また、母の負担を軽くするために、受けられる介護サービスはすべて利用しようと考えていた。

「それくらい、私がやるわよ」

母は何でも自分で背負い込む癖があった。

実際、身体介護が始まってから、おむつ替えをヘルパーさんに頼り切るのを嫌がった。一日に三度頼めるところを、二度でいいと言い張った。頭がしっかりしているのに、他人に下の世話をされる父が不憫だというのが理由だ。

でも、それは理想であって、現実的に老老介護では厳しい話だ。

数日間の看病ならいざ知らず、先の見えない介護である。極論だが、私は体力のいる介護はプロに任せ、家族はメンタル面でフォロー出来ればいいと思っている。

現に、父が亡くなってから母に「おむつ替え、大変じゃなかった？」と訊くと、大変だったと躊躇ない答えが返って来た。

だが、『大変になる前』の母には気力が十分にある。やれると思ってしまう。体力が衰えても心は若いままだ。父より七つ年上なのに。

とは言いつつ、私が母の立場で夫に溢れる愛情を持っていたら、世話を他人に任せたくないと思ってしまうだろう。母の気持ちはとても良くわかる。母も私も自分でブレーキを掛けないと、限界を過ぎるまでとことん動いてしまう性格なのだ。

だから、最期まで本当の笑顔でいる為にも無理はしない、させないと心に決めた。

９月１日

二回目の手術後の退院。

右半身に少々痺れがあるようだが、歩くのにそれほど危なげはない。杖を使い始めたが頼り切っている様子はなかった。

ただ、階段の上り下りだけは不安があるようで、日課だった散歩には消極的になる。母に付き添ってもらい、週に一、二回出る程度になった。

その為、肺がんになってから止めていて、母に内緒で復活させていた喫煙は出来ないでいた。仕事を辞めてからは、朝夕の散歩時に吸っていたからだ。

父はきっと悶々としていたことだろう。

９月１３日

車の廃車手続きをする。

二度目の手術以降、父は運転することを辞めた。医師に止められたからだ。だが、今年が免許更新の年だったので、今月終わりの誕生日ぎりぎりまで車を手元に置いておきたがった。

数か月前まで、父は免許の更新をするつもりでいた。シニア運転者講習の日程まで抑えていた。

「講習、キャンセルしないといけないね」

お知らせハガキを見ながら、そう告げるのも胸が痛む。

この時、父が何を考えていたかは、なかなか廃車手続きに踏み込めなかったことを思えば容易に想像がつく。でも父は、「ああ、電話しといてくれ」と、にこやかに答えた。

私が五歳くらいの頃（つまり四十年前）、父は初めて買った車の助手席に私を乗せ、建設中の小学校の校庭で運転の練習をした。オートマだったはずだが、不安だったのか校庭をぐるぐると何周かした。こういうところは慎重な性格が出る。

その学校は現在、廃校になっている。ガランとした校舎や雑草の生えた校庭を見る度、一時代を超えてきた両者に何か不思議な繋がりを感じる。

父は車を購入するまで、カブというバイクで私をいろいろなところに連れて行った。

父のズボンのベルトがグリップ代わりだ。背中側のベルトに手を突っ込んで掴まる。走っている最中に眠ってしまったこともあるらしい。体を固定されるものが他になく、ベルトに食い込ませた手が唯一の命綱だった。今だったら危険行為で虐待などと言われてしまうのだろうか。でも、私は成長してからもバイクの後ろに乗るのが好きだったので、トラウマとなるような怖い思いはしなかったようだ。

父の最後の車となったのはホンダのアコード。父は歴代、ホンダ車を愛用していた。

乗り心地のいい車だったし、値段がつかないというので、私が引き継いで乗りたい気持ちもあった。が、母子家庭でアパート暮らし故、車の維持費にお金を掛けられない。普通車は軽に比べて税金が五倍くらい高い。

廃車当日、私は複雑な気持ちで、アコードに載っていた工具やクッションを自分のアルトに乗せ換えた。

９月２７日

　通院による全三十回の放射線治療を開始した。

「病院まで送迎してくれー」

　父は私に電話でそう頼んだ。

　私はこの一週間前まで、電注センターで働いていた。だが、センターが半年後に地方移転となり、全員辞めることが決まっていた。

　仕事は夕方からで、送迎してからでも間に合う時間ではある。しかし、私の体力からして、一か月の間に徐々にきつくなっていくのは目に見えていた。遅かれ早かれ解雇される仕事だ。私は送迎に専念することにした。

　通院では、助手席が空いているというのに、父は後部座席に座りたがった。私は運転歴十年で、走行中に事故を起こしたことはない。それでも娘の運転を信用できないらしい。

　初日、行きの道中でコンビニの前に差し掛かった。

「ちょっと寄ってくれ」

　父が唐突に言った。何か買いたいものでもあるのかと駐車場に入ると、父は私を待たせて車から降りた。

　杖をつきながら歩いていった先は、店の前に設置してある灰皿の前だ。手術以降、久しぶりに吸ったのではないだろうか。一本吸ってから足取り軽く戻って来た。病院でも毎回、診察券を私に託しては喫煙所に直行した。率先して歩く父の姿に、私は「いいリハビリだ」と思いながら見ていた。

　また、大学病院へ行くには父が通っていたパチンコ屋の前を通る。そばに近づくにつれ、父がそわそわしだした。

「もう、二か月くらいパチスロやってないんじゃない？」

　私がそう切り出すと、「帰りに寄ってくか」と父が嬉しそうな顔をした。即、了承。私も父の

子なので、ギャンブルとなると血が騒ぐ。節約生活で遊戯断ちをしているので尚更だ。

パチンコは四十年前、一つ一つ球を投入して打っていた時代から連れていってもらっていた。椅子などないので立ったまま打つ。ハンドルは手動。勝った日には茶色の紙袋にお菓子をたくさん入れて持ち帰った。

昔は子どもが入店してはいけないという規制はない。もっとも、父が私の存在を忘れるほど熱中することはなかったが。

三十回の通院中、数回に渡って寄り道をしたわけだが、その度心配して待つ母に、父娘で怒られたことは言うまでもない。

だが、右手に違和感を持ち始めていた父が、積極的に楽しく手を動かすのにちょうど良かった。必ず隣同士の台に座るようにし、何かあった時に備えることは念頭に置く。リーチが掛かると目押しを頼んだ。脳のリハビリだ。

これは私が都合のいいように解釈したものだと思っていたら、とある老人施設では業者から古くなったスロットルをもらい受け、リハビリとして使っていると先日のテレビで報道していた。

お年寄り達はコインを掴んで、投入口に入れて、スロットルを回して、ボタンを押すという一連の動作を楽しんでいるという。

考え方として間違っていなかったのだ。私は理学療法士の素質があるかもしれない（と誰かに言ってもらえたら嬉しい）。

一方で表情を曇らせる母に、私は「体の自由が利かなくなって、ただでさえストレスの塊になってるから、出来る限り、やりたいことをやらせてあげようよ」と、説得していた。

ごく近い将来、タバコもパチスロも出来なくなる日がくる。そのことを何度となく母と話した。

母は「そうね」と納得するのだが、日を改めると再び声を尖らせる。夫の健康を常に気遣ってきた妻の立場としては、体に良くないとわかっていることを、「好きなようにやらせてあげよう」と言えないのも無理はない。

１０月２０日

いつものように放射線治療科の待合室で、私は父の治療が終わるのを待っていた。

この待合室にはテレビがあり、いつも何かしらのビデオが上映されている。ジブリだったり、ＮＨＫの情報番組だったり……。音を小さくして、その日一日、同じものが繰り返し流される。
今日は珍しくお笑いで、ドリフターズの『８時だよ！　全員集合』だった。

メンバーがかなり若く、ドタバタと軽快に走り回っている。舞台上で大型バイクを走らせたり、トラやライオンなどの猛獣相手にコントしたりと、ホールでの公開生放送とは思えない大胆さだ。昔見ていたはずなのに、なぜか新鮮に感じた。

待合室に誰もいなかったこともあり、私は少し大きな声で笑っていた。そのおかげで、病院の外来という、どちらかというとエネルギーが停滞しそうな場所で思いがけず元気になった。

自然に笑っていた私は、ふと、いつも笑えるビデオを流していればいいのにと思った。

笑いが様々な病気を回復させた例は、ネットを検索すればたくさん出てくる。笑いによりＮＫ細胞が活性化し、がん細胞を破壊したり、リウマチ患者のインターロイキンの値が下がったり、等々。病気の症状が軽減されることは実証されているのだ。こんなに手軽で安全な方法を使わない手はないだろう。

また、『病気にはなっても病人になるな』という言葉を聞いたことがある。

笑っている間は、自分が病気であるということを忘れている。忘れているということは、病気に囚われていない状態だ。楽しいことに気を取られているうちに、いつの間にか具合が良くなっていたということが、一度や二度、誰にでもあるのではないだろうか。病状にもよるが、笑う機会が多ければ多いほど辛い時間は少なくなるはずだ。

とは言っても、病院の待合室は痛みを堪えている人も多くいるわけで、騒がしい音が苦痛に直結する場合もある。だから、一概に「笑いを取り入れましょう」とはいかないだろう。しかし、病気を扱う機関でＴＰＯを考慮した上、もう少し笑える場面を増やせないものかと思った。

放射線治療が後半に差し掛かったこの頃から、父は車の中で、これまでの人生を振り返るような昔話を私に話して聞かせた。

親戚の話や上京してきた頃の事、母との馴れ初めなど……。

ただ、具体的にどんな話だったのか、断片的にしか思い出せない。運転しながら話に集中できる技量が私にはない。

でも、父の嬉しそうな声だけは、しっかりと頭の中に残っている。

私が四五年間生きてきた中で、父と過ごした一番濃い時間だった。いや、子どもの頃はいつも父と一緒だったので、私が忘れていた時間の再来だったのかもしれない。

この時はまだ、父が死を覚悟していたとは思えないのだが、もしかしたら予感していたのだろうかと、今思う。

１１月１日（１）

　放射線治療もあと数回を残すのみとなった。父の髪の毛は少々抜けたが、吐き気などの苦痛な副作用はない。

　この日、父は母に買い物を頼まれていた。天井照明だ。私は直接聞いていなかったので、父が言った「こんなようなもの」に近いものを二人で探した。

　だが、父は母に「同じ形のものがなければ買ってこないで」と言われていたことを忘れていた。買って帰ったものは、材質は同じだが形が違うもの。案の定、母の機嫌が悪くなった。

　私は、労いの言葉こそ受けてもいい場面で、思いがけない言葉を受けて戸惑い、その後、じわじわと怒りが込み上げてきた。

　送迎だけでも疲れるのに……。

　実際、一か月に渡る送迎は想像以上に私を疲労させた。アパートから実家まで三十分、実家から病院まで三十分。毎日往復二時間の道のりを、父の体に負担が掛からないように目と耳と気を遣って運転していたのだ。

　悲しくて、悔しくて、反論するより先に涙が出てきた。でも、親に泣いているところを見られるのが嫌な私は、必死で堪えていた。

　母娘の険悪な様子を、父は居間から内心悲しみでいっぱいで見ていたのであろう。それでも父は笑顔を絶やさなかった。

「コーヒー、いれてくれ」

　父は私の機嫌を取ろうとしたのだと思う。何か違うことで、空気を変えようと思っていたのかもしれない。でも、私はこの場にいることが耐えられなかった。

「もう帰るから」

　私は仏頂面でそう言い放った。

「そしたら、照明だけ取り付けてってくれるか。お父さん、付けられないから」

　体が不自由になってしまった父は踏み台に乗れない。母は小柄なので天井に届かない。私は他の

誰かを当てにできないお願いをされてしまった。

　仕方なく、私は無言のまま照明器具を箱から出した。こういう時に限って組み立てに手間取る。そばで父が見守っている。油断すると泣きそうだ。

　四苦八苦した末、照明を天井に取り付けた。

「ありがとう。助かったよ」

　その言葉にも素直に頷けず、目を合わせることのないまま私は実家を後にした。

　その一時間後、父は大きな痙攣を起こした。母から連絡があったのは、既に救急車で病院に運ばれてからだ。術後、初めての痙攣だった。父はそのまま入院した。

　この痙攣により、酷い幻覚が起きた。見えないものが見えたり、思い違いを信じ込んだり。
また、ベッドから勝手に降りてしまう為、身内がいる時以外は拘束帯で固定された。

１１月１日（２）

「なぜか動けないんだよなぁ」

　上半身を起こそうとしながら父が言った。拘束されていること自体、わからないようだった。

「これが付いてるからじゃない？」

　私は『いつもの父ではなくなった父』に、事実だけをさらりと述べ、拘束帯を外す。いつもの父ではなくても『穏やかな父』である事には変わらず、縛られていても声を荒げたり、反発して暴れるというようなことはなかった。

　数日たっても幻覚が治まらず、医師からは、「幻覚症状が治まるかどうかは何とも言えない」と告げられた。

　痙攣の原因の一つに、精神的ショックがあると何かで読んだ。私は、治らなかったら私のせいだと悔やみ、一人になると涙が止まらなかった。

　幸い、十日程すると幻覚が治まって来た。入院中に、残りの放射線治療も済ませた。病院にいるより家にいた方が改善しやすいとのことで退院。家に戻った途端、幻覚症状はなくなった。あとは一か月に一回通院すれば良いとのことで、私の送迎生活も一段落ついた。

　症状が起きるきっかけは悲しいものだったが、幻覚だけに限って言うと、ある意味貴重な体験だった。

　父愛用の腕時計をベッド脇にあるサイドテーブルの引き出しに入れておいたのだが、父はそれを取り出し、

「ぶかぶかで合わないんだよ。他の人のと入れ違ったんだな。看護婦さんに聞いてきてくれるか」

　と、言った。

　私は父の話に合わせ、「わかった、ちょっと待ってて！」と言い、病室を出たところで立ち止まり三つ数える。戻ってから「あったよ、これだよね」と言いながら時計を父の腕にはめた。すると、父は少し変な顔をしつつも、「これだ」と納得していた。

また、昆虫好きの父らしい幻覚もあった。

「あのドアからナナフシがたくさん入ってくるんだよ。ほら、母さんの服にもいっぱい上がって来たよ。払わなきゃ」

私は、「ホントだねー」と言って、母の服についている見えないナナフシを追い払う。放射線治療室に移動する時も車椅子にバッタがいたらしく、看護師さんに訴えていた。看護師さんも父の話に合わせる。

私はこれまでの対応の仕方で間違っていなかったかを聞いてみた。すると看護師さんは、「うん。そうだねって答えていればいいのよ」と小声で教えてくれた。

もう一つ、父は男性らしさを発揮して、ちょっとエッチな幻覚も見ていた。

「昨日、ベランダで裸の男女が抱き合ってたろ？　おまえがそういうのを平気で見ていられるとは思わなかったよ」

そう言って、父はニタニタしながら私を見た。

日頃、下ネタＯＫな私も、親と話すのだけは抵抗がある。それには何と答えたらいいかわからず、勘弁してくれ、と思いながら苦笑いしていた。

他にも病室の壁から人が浮き出てくるという怖いものもあった。幻覚症状がなくなっても父はそれらをすべて覚えていた。

１１月２５日

一ヵ月ぶりの通院。私は新しい仕事を始めていたが、休みを取って送迎する。

父は月初めの痙攣以来、歩行が更にふらつくようになった。私は病院の玄関前に車を停め、腕を支えてロビーの椅子に座らせてから、駐車場に車を置きに行った。

診察で父は「手がしびれる」というようなことを訴えていた。右側の視野も欠けたり、不自由なことが増えていただろうが、痺れが一番気になっていたようだ。

毎月一回、五日間連日で抗がん剤を飲むことになったのだが、正月に食欲がないのは気の毒だということで、十二月の一週を過ぎてから飲むように指示された。そうすれば、一月分も三が日を過ぎてから飲めばいいことになるからだ。

だが、抗がん剤を服用した四月まで、口内炎が出たものの、吐き気などの副作用が一切出なかった。

私自身、抗がん剤を飲むと嘔吐して苦しむイメージしかなかったので、これだけは本当に助かった。私は人が嘔吐するところを見るのが苦手だ。想像するだけで血の気が引いてくる。自分が吐くのも嫌だ。ドラマなどでそういったシーンが出てきそうになると目を背ける。ただ、自分の子どもなどが吐いたりした時は気合で片付ける。いざ、看護の場面になると気持ちが切り替わるらしい。

結局、抗がん剤により食欲の落ちなかった父は、「薬が体に合ってるんだなぁ」などと言っていた。ただ、この頃の二か月間くらい、父の気力が落ちていた。

床から立ち上がることが難儀になり、元々排尿間隔が長かったこともあって、一日の大半を居間の座椅子に寝そべって過ごした。

「家の中を歩けばいいのよね」という母の言葉も、「動かないでいると、本当に歩けなくなるよ」という私の言葉も響かない。

私はネットでリハビリの動画を見ていき、「こうやって立ち上がるんだよ」と伝えたが、「動ける人間が簡単に言うな」と、却下された。

座面が上下する電動座椅子も検討したが、父は興味を示さず、なんとなくピンとこなかったため採用せず。

父は時折、年の初めに別の病院で受けた治療の事を口に出すようになった。何か悔やんでいるか、疑問を持っているといった様子だった。

２０１２年1月1日

　正月、私は子ども達を連れて実家に泊った。わざわざ泊るほどの距離ではないのだが、盆と正月だけは数日間寝食を共にする。

　実家に泊ると必ず行くのがゲームセンターと回転寿司だ。前回は夏休みに行った。二回目の手術前だった。

　私はこの時、もしかしたら皆でここに来るのは最後かなと思っていた。もしそうなら、父もいるこの風景を目に焼き付けておこう。そんなことを考えながら、少し離れたところから、悠々と歩く父を見ていた。

　予感は当たり、今回は皆で家に引き籠った。

　取り寄せたカニと少々のお酒。笑ってはいけないガキの使い、箱根駅伝。

　外出しなくても、家族で食卓を囲める幸せがそこにあった。

１月１１日

二回目の大きな痙攣。入院。

今回、幻覚は起きず、十日で退院する。

２月４日（１）

　通院日。

　一回目の痙攣を起こしてから、パチスロのパの字も口にしなかった父に、遊ぶ気力が戻って来た。「寄り道してくか」の言葉である。

　私はそれまでも外に連れ出したい気持ちはあったのだが、出掛けた先でいつ痙攣が起きるかわからない不安もあった。私の一存で無理はさせられない。

　だから、父からの「出掛けたい」という意思が示されるのを待っていた。それがあったら、リスクは承知の上で連れ出そうと思っていた。

　午後の活動の体力を温存する為に、病院の車椅子を利用した。

　二階で採血と診察を受け、七階の病棟でちょっと驚きの用事を済ませ（気づかなかったこちらも悪いし、お世話になった病院の名誉のため書きませんが）、一階で会計、薬の受け取りと、午前中だけでかなりの距離を移動した。午後のことがなくても車椅子を使って正解だった。

　私は車椅子介助を初めて行ったのだが、恐る恐る押していたのは最初だけだった。広い院内で時々迷子になる度に、進む速度を加速させていた。

　すべて終わったのは昼近く。地下にあるコンビニでパンを買い、駐車場に止めたままの車の中で昼食をとった。

　いざ、パチンコ店へ。

　パチスロの台に二人で並んで座る。最初の一時間は全く当たりが出ない。

　いくつか台を移動すると徐々に出始めた。下の皿に、二人してコインが溜まってくる。溢れそうになったので、箱に移し替える。でも、かなりの金額をつぎ込んだ後なので手放しでは喜べない。

　そうして二時間が経過した時のことだ。

２月４日（２）

　父の上半身が、だんだんと麻痺が進んでいる右側に傾き始めた。まっすぐに座っていられない。それでも、意識はしっかりしているので、父はスロットルのボタンを押し続ける。

　初めは少しの傾きだった。でも、少しずつ少しずつ、最後には右側にいた私に寄り掛かる勢いで傾いた。父はその状態でも、コインを遠くなった投入口に入れようとする。せっかく出始めたのに、止めるわけにはいかない。そんな感じだったのだろう。

「限界だ。帰ろう」

　私はそう言って、左手で父の体を押さえながら、右手で二人が出したコインを箱に入れた。それに気づいた店員さんが箱を計算機に運んでくれたので、私は父の腕を抱えて立ち上がらせた。

　計算機の前まで移動し、レシートが出るのを待つ。その間、父を立ったまま待たせた。

　私はレシートを受け取る際、ほんの少しだけ父に背中を向けた。

　背中で何やら声がするので振り向くと、父は床に尻をついてしゃがみ込んでいた。足に力が入らなくなったのだ。

　私は慌てて父の体を支え、出口へと向かった。その前に急な階段がある。パチスロコーナーは地下にあり、エレベーターがない。私は父の腕を脇付近で掴み上げるようにして階段を上った。

　父を椅子に座らせ、カウンターで景品交換する。

　父の元に戻り、出口の前へ来た。来店した若いお兄さんが、私達の尋常でない様子にドアを抑えてくれた。

　外に出て、離れた駐車場に車を取りに行く為、父をブロック塀に座らせようとすると、その場所で屋台を構えていたたこ焼き屋さんが、置き看板をどかしてくれた。

　こんなフラフラな状態で遊んでいる場合かと思われてもいいくらいなのに、出逢う人が皆、優しかった。私は何度も頭を下げながら、心温まる思いでいっぱいになった。

　この日、父にとって人生最後のパチスロとなった。

しかも、負けたと思いながら換金すると三千円勝っていた。勝ち逃げだ。

必然的に喫煙生活にもピリオドを打ったわけだが、父のやりたい事をこの二つに限っては、正に動けなくなるまでさせてあげられたかなと思っている。

２月１２日（１）

前の晩トイレに起きた際、父が自力で立ち上がれなくなったと母から電話があった。排泄のコントロールが困難になり、間隔も短くなったので、紙おむつを買ってきてほしいという。

実家に向かう途中で私は紙おむつの他、おしりふき、防水シーツを購入。家に上がると、布団とパジャマを汚したままの父が寝室で横になっていた。

這うことは出来た為、父には居間に移動してもらった。母が布団周りを整える間、私は父の着替えをさせる。

絨毯を汚さないよう新聞を敷き、その上で下着を脱がせる。お尻に炎症がある為、父は仰向けになると痛がった。便で汚れていなければ、おむつを当てるだけで済ませたのだが、下痢をしていた為、おしりふきで綺麗に拭わなくてはならない。介護に不慣れな上、横向きでの作業が困難を極めた。

本来、男性におむつを当てる場合、おしりをすっぽり覆うおむつの中に、パッドタイプのものを一枚は陰茎に被せ、もう一枚は便を受け止められるように尻に敷き、パッドだけを替えればいいようにする。そうすれば、取り替えるのも楽だし、本人への負担も軽い。経済的でもある。

だが、そんなことなど知らない私は、大きなおむつだけを当て、垂れ流しに近い状態の尿と便ですぐに汚れるおむつを、四苦八苦しながら替え続けた。

救われたのは父が嫌がらなかったことだ。

自分の状態をはっきりと理解していて、おむつをつけることに抵抗を示さなかった。必死に「横向ける？　少し、腰上げて」と言う私に、父も一緒に悪戦苦闘してくれた。だから、排泄の自立が出来なくなったという事態なのに、父にも私にも暗さは全くなかった。

ただ、後にヘルパーさんに替えてもらうようになった時、父は毎回黙ってじっと目を瞑っていた。体が不自由なだけで意識の高さは元のままなので、他人に下の世話をしてもらうことに対しては恥辱的な思いがあったのだと思う。

母も「ヘルパーさんに替えてもらうのが、ちょっと可哀相だったわ」と言っていた。でも、介護は感情論では済まされないところがある。おむつ替えは私でさえ重労働なのだ。高齢の母だけがそれを担っていたら母も倒れていただろう。

そのことを父は十分わかっていた。寝たきりが長くなるにつれ、母が父を気遣ったように、父も母を労わっていた。早朝におむつが汚れても、ヘルパーさんが来るまで取り替えなくていいと言っていた。複雑な思いを抱えつつ、夫婦はお互いに気遣い合っていた。

そうは言っても、夕方から翌朝までは時間が長い。

父が亡くなるまでに介護の要領を掴んだ母は、たまにしかおむつ替えをしない私よりも手際よく世話が出来るようになっていた。意識して他者に頼ったにしても、家族が動かなくてはならない場面が多いということだ。

２月１２日（２）

　翌日。

　私は息子を連れ、実家に行った。

　おむつの後方から排泄物が漏れてしまったようで、直前に出来た父の汚れ物が匂いと共に山になっていた。

　私が片付けようとすると、母は「やるからいいわよ」と、私達をお客さん扱いする。母は昔から、自分で出来ることを人に頼ろうとしないところがあった。別の場面なら良いことであっても、介護は一人で抱え込むものではない。

「それじゃ、来た意味がないでしょ」

　私はそう言い放ち、息子にも手伝わせながら洗濯を始めた。

　父はずっと、うつらうつらと眠っている。薬の影響か、声を掛けなければ一日中眠っていそうだ。

　しかし、排尿時にはとても痛がった。症状を聞き、膀胱炎か尿道炎ではないかと思った。近くに訪問診療をしてくれる泌尿器科があるので電話してみたらどうかと提案する。翌日がその訪問診療日。だが、父が拒否したので連絡しなかったとのことだった。

　布団では何かと不自由なので、介護用ベッドを借りようということになった。

　母からケアマネージャーさんに連絡する。訪問してもらい、ヘルパーさんにも毎日朝夕に来てもらうことになった。

　ベッドは３モーターで、昇降と背上げ、足上げの出来るタイプだ。マットは床ずれを防止するもの。どのくらいの効果があるのかわからなかったが、ほとんど寝返りをしない状態だったのに、亡くなる四カ月後まで床ずれを起こさなかった。

もちろん、母やヘルパーさん達が背中にクッションを差し込んでくれたりしたおかげだと思うが、マットが床ずれ防止とうたっているだけの事はあるなと思った。

２月２６日

　日曜日で学校が休みの娘も連れて実家へ。

　息子には日頃料理を手伝わせていたので、その成果を発揮してもらう。実家の台所で、肉じゃがを私と二人で作った。

　娘には父の腕をマッサージさせたり、髭剃りをお願いした。息子も後から加わり、一緒に父の足を揉んだ。二人とも大人しいタイプなので、父が「ありがとう」というまで、無言でひたすら揉み続けた。

　父は目を細めて、穏やかに笑っていた。

　父が動けなくなるまで、私は父の体の機能低下を防ぎたい気持ちでいっぱいだった。

　歩いたりパチスロしたりなどで頭と体を使い、あわよくば余命一年の期限など楽に突破し、もっともっと元気に動き回ってもらおうと躍起になっていた。

　でも、寝たきりの生活が始まって二週間。父が、自分で出来ることさえも母に頼っていることを目の当たりにし、私の中で張りつめていたものがふと緩んだ。

　とにかく和やかな気持ちで過ごしてくれればいい。

　そんな思いに移行していた。

　だから、父にリハビリを強要することはなかった。治る病気であれば、気力が落ちてようが叱咤激励するところだが、そうではない。だから、穏やかに過ごせればいい、そう思っていた。

　ところが、それまで全く動こうとしなかった父がベッドから足を出し、「トイレに行く」と言い出した。孫が甲斐甲斐しく世話をしたことに感化されたのだろうか。

　私はすかさず、「わかった！　ちょっと待って！」と言い、息子に手を貸すよう声を掛けた。母は「無理しなくても」と不安げだ。でも私は、父の気力が復活したらとことん応援したいと思っていた。

父の右側から息子が肩を貸し、私が左側から支える。父は二週間振りにベッドから立ち上がった。二、三歩進んだものの、やはり足ががくがくとして体を支え切れない。急遽、そばに置いていたダイニング用の椅子に座らせた。それには何とか座っていられる。夕飯には少し早い時間だったが、皆で食卓を囲めるチャンスだ。

「もう、食べちゃおう」

私はそう言って、ベッドテーブルを父の前に引っ張って来た。そして、こたつの上とサイドテーブルに料理を並べる。

「いただきます！」

少しの間だったが、思いがけず皆で顔を合わせながら食事が出来た。

その後、ヘルパーさんが訪問した時に、介助してもらいながらベッドサイドに腰掛けることはあったようだ。左手の握力はまだ力強かったので、ベッドの柵に紐をつけ、自力で起き上がれないか試したが、そこまでの力はなくなっていた。

３月２日（１）

　通院日。ケアマネージャーさんの紹介により、介護タクシーを頼んだ。

　家に来たのは五十代後半に見える男性が一人。運転手さんだ。

　実家はエレベーターのない団地の四階。私は、どうやって動けない父を一人で降ろすのだろうと思いながら見ていた。

　すると、運転手さんは慣れた手つきで父を車椅子に移乗させ、グリップをしっかり持って、前向きのまま階段を一段一段ゆっくりと降りていった。踊り場は古い団地故に狭いのだが、車体を斜めにしてうまく方向転換していた。

　痩せてしまったとはいえ、体重六十キロはある人間を乗せた車椅子はかなり重いはずだ。それを運転手さんは危なげなく操作する。

　築四五年のこの団地。高齢者が住民の多数を占めているのだが、こんな技術を持った介護者がそばにいない限り、引きこもりになるお年寄りや障がい者が増えること必須だ。

　私は、「こうなったら、『階段を昇降する電動車椅子』を開発するしかない」などと考えた。

　だが、既に開発されており、レンタル料一割負担で月額六千円弱で借りられることがわかった（父の死後に発覚。二〇一三年現在）。

　でも、これを借りるほどの人は要介護３以上だろうから、他にもベッド周りの物やヘルパーさん、訪問入浴、デイサービスなどを使っているうちに、一割負担の利用限度額を超え、家庭になくても済んでしまう階段昇降サポート付き電動車椅子には、なかなか手が出せないだろう。

　そうなると、やはり引きこもりが増える。市内には同じくらい築年数の経った団地が数多くあり、同じような問題を抱えていると聞いた。

　四人に一人は六五歳以上の高齢者という時代。全団地にエレベーター設置が理想だが、敷地条件や容積率、建蔽率、日照規制や他の法規制をクリアしなければならない。何よりも予算という問題が大きな壁を作っている。

　ならば『家庭用の階段昇降機』を各階段に付けられないだろうか。階段の手すりを付ける部分

にレールを設置して、椅子を昇降させるものだ。安いもので一基５０万円程度。エレベーター一基約６００万円。十分の一のコストで済む。

うちの団地は総戸数３，４３５戸あり、単純に十戸に一基計算で３４４基。掛ける５０万で１億７２００万。市内には大規模住宅が他に十あり（すべてにエレベーターがないかは不明）、戸数が少ない団地もあるので予算は１０億くらいか。でも、体の不自由な人がいない階段では使われないまま維持費だけが掛かる状況になりかねない。

やはり『階段昇降可能な電動車椅子』を『無償』で貸し出せるようなシステムがあるといい。先程も書いたように、利用者は既に限度額を使い切ってしまっているので無償でなければ意味がない。ただこれも、操作指導を受けないと借りられず、高齢者だけの世帯だと厳しいかもしれない。

一階に着くと、運転手さんはあらかじめセットしておいたストレッチャーに父を寝かせた。そして、介護タクシーであるワゴンのバックドアを開け、救急車のようにストレッチャーを乗せた。私はサイドからワゴンに乗り込み、父の顔が見える後部座席に座った。

一カ月振りの外出。父からも窓の外が見えるらしく、運転手さんの声掛けにより、早咲きの桜に気づいた。

「寒桜だね」

父は小声ながらも、しっかりした口調で応えた。

桜と言えば、実家の団地は樹齢四十年以上の桜が見事で、毎年桜祭りを行っている。シルバー作業員の父達が出店を開いたりするのだが、予定した日程に必ずといっていいほど雨が降る。

父は昔から雨男だった。

私が小学生だった時の運動会はたいてい雨で、平日に順延する為まともに見に来れたことがないのではなかったか。父自身のゴルフも雨の中でプレイする。一度や二度ではない。

最期、通夜も葬儀も雨だった。ここまで徹底されると見事としかいいようがない。

３月２日（２）

　病院に到着し、運転手さんはストレッチャーを押して二階の脳神経外科の前まで一緒に来てくれた。その上、私が「長く掛かりそうだから、別の場所で待っててください」と言うまで、ずっとそばに付き添っていてくれた。父を帰りも乗せるし、待機時間も料金に入っているのだろうが、とても良心的な運転手さんだ。

　待合室で待つ他の患者さんやその家族は、何事かといった様子で私達を見る。ストレッチャーに乗っている割に、急いで診察されるわけでもないのだから当たり前だろう。父は、「飴をくれ」とニコニコとしている。着いた当初は居心地の悪さを感じていたが、父の笑顔に周りの目などすぐにどうでも良くなった。

　寝ている状態とはいえ、特別な異変があるわけではない父は、他の患者さんと同じように一時間待たされた。

　いざ呼ばれてストレッチャーごと中に入る。いつも診てもらっていた診察室にはストレッチャーで入れない為、診察室と中で繋がっている処置室に通された。

　医師は父に少し声を掛けた後、父を処置室に残し、私だけ診察室に呼んだ。

「まだ、あんなに動けない状態じゃないはずなんだけどな」

　ストレッチャーで通院してきたことに、医師は驚いていた。

「リハビリする手もあるけど……」

　医師は言葉を濁すようにそう言った。

　私が家での様子を伝えると医師は、

「気力が落ちてるのか……。リハビリによって動けるようになったとしても、その頃に再発することもあり得るからね」

　と、付け加えた。

　そうなると、父の落胆は大きなものとなるだろう。元々あった私の考え、『穏やかに過ごさせたい』事を告げると、「リハビリはしない方向で」ということになった。

食が細くなってきた不安を伝えると、エンシュア・リキッドを処方された。これはコーヒー味のする栄養補助飲料だ。これを飲んでみて、次回、血液検査で栄養状態を診るという。

診察を終え、会計と薬の受け取りの為に一階に移動する。ストレッチャーの父と運転手さんには少し離れた広いスペースで待っていてもらった。

抗がん剤は外部の薬局では取り扱っていないので院内薬局でもらうのだが、ここでもかなり待たされる。

ようやく呼ばれ、ビニール袋いっぱいの数種類の薬と、箱詰めのエンシュアを一か月分出された。

「台車使ってくださいね」

受け取り窓口の横の関係者出入り口から、薬剤師さんが台車を出してきてくれた。ガラガラ物凄い音がするので、ストレッチャー以上に目立つ。運転手さんのところまで運び、父の付き添いを交替して、ワゴン車を駐車場に取りに行ってもらった。

運転手さんは病院玄関に車をつけると、父と箱詰め飲料をひょいと車に載せてくれた。

私はその間に台車を薬局に返しに行く。再びガラガラとうるさいので持ち上げたいところだが、台車も重い。私は「ええーい、目立ってやる！」と、暴走族さながら音を立て、薬局まで台車を走らせた。

再びワゴンに乗り込み、走ること三十分。実家の棟の前に到着。

運転手さんは一階で父を車椅子に乗せ換え、今度は階段を上る。四階まで休むことがなかった。物凄いパワーだ。上る前に、「飲み物も後で運びますからね」と言ってくれていた。本当に心優しく、どこまでもサービス精神のある運転手さんだ。

父をベッドへ移乗させて業務終了した運転手さんに料金を支払う。決して安くはない金額だが、もっと払ってもいいくらいのサービスだった。名刺をいただき、次回もお願いすることにした。

３月２３日（１）

　私の仕事の都合で、月一回の通院を一週間早めてもらった。再び介護タクシーを頼み、通院。今回は熱があった為、受付でその旨を話すとマスクを手渡され、すぐに処置室に通された。そのまま入院となる。

　顔見知りの看護師さんが、

「あらぁ、ぐったりしてる。でも、熱が下がればいつもの笑顔になるわよね」

　と、言った。父は病院でも、とにかく笑顔を絶やさなかったようだ。

　尿道炎の疑いがあるとの事で抗生剤を投与される。その日は声を掛けてもろくに返事が出来ない状態だったが、翌日には薬が効いて落ち着いた。

　排泄はおむつか尿瓶を使用していた。車椅子でトイレにも連れて行ってもらっていたので、家でもポータブルトイレを使えないかと看護師さんに訊いてみた。

「病院でも二人掛かりで車椅子に乗り換えてもらっているので、家庭では難しいかもしれません」

　そんな答えが返って来た。私や息子が同居していれば可能だったかもしれないが、仕事や学校がある。母は当然無理だし、ヘルパーさんも一人では無理なのかと諦める。

　だが、父の死後、私はその答えに疑問を持った。

　私自身、あまりにも不甲斐ない介護しか出来なかったので、ヘルパー２級の資格を取ったのだが、実技の一つにポータブルトイレへの移乗があった。麻痺が進んでいる人に対しても一人で介助する。つまり、ヘルパーはそれが出来るはずなのだ。そうすれば、おむつへの排泄の回数が減るし、人としての威厳が保たれる。

　父は、亡くなる十日くらい前まで、「（おむつに）おしっこ、漏れちゃったよ」と恥ずかしそうに笑っていた。寝たきりでもれっきとした七十代の紳士なのだ。まして、六月初めまで車椅子に腰掛けて、自分で食事をとれる状態だった。おむつに排泄しなくてはならない屈辱は相当なものだろう。介護の詳細を知らない為に自分で判断できなかった汚点である。

もしかしたら、下手に無理をさせて痙攣を起こさせてはならないという医師の指示があったのかもしれない。そうなると、ヘルパーが危険を冒してまで排泄介助を行うのはリスクが大きい。

どちらにしても、早く介護の勉強をしておけばよかったという思いである。

３月２３日（２）

入院中、母と私は別室に呼ばれ、医師から抗がん剤治療を終了するか否かを問われた。通常、半年で一度止める人が大半だというので同意する。

また、長期療養する転院先を探すか、自宅で療養させるかを本人と相談して考えてほしいとも言われた。転院先を探すとなると、ベッドが空くのを二か月くらい待つことになるので、早めに手配した方がいいとのことだった。

父は、考えて結論を出すことが少し困難になっていた。だから、私から「病院の白い壁をずっと眺めているより、家にいて自由にテレビとか見てた方がいいよね？」と問い掛けた。

すると父は、にっこりと笑顔を返してきた。

誤解があるといけないので付け加えると、父は病院でとても良くしてもらっていた。看護師さん達が親身になって話し相手をしてくれるので、父はとても楽しそうだった。家族も丁寧に対応してもらっていたので不満は全くなかった。

でも、苦しそうに唸っている訳でもないし、管などの医療器具に頼っているということもない。普通に会話が出来る状態で日常から離れた場所で寝ているより、見慣れた自宅の風景や生活音の中で過ごした方が、父としても落ち着くのではないかと考えたのだ。

家族としても、時間を気にせず会いたい時に会える。

母も家にいてもらった方がいいと言った。ただ、理由が少し違う。毎日、病院に通うのが体力的に限界だったのだ。

完全看護だから毎日通う必要はないのだが、「寂しがるから」と言って、無理をして通っていた。母が行ったら行ったで、父は母を無言で引き留め、帰らせないらしい。私の事は引き留めないが、母の事は引き留める。私は母の代わりにはなれない。

だから、私は「何かあった時、すぐに往診してくれる先生が見つかれば自宅がいい」と希望を出した。

往診医を自分で探す当てがなく不安だったのだが、病院の相談室で、実家の近所にある訪問医療・訪問看護が専門の施設を紹介され、問題は即解決した。退院日にさっそく往診する手配もしてもらえた。

この施設は開設されたばかりだという。タイミングが良かった。実は、前々回の通院でも医師から同じ話があったのだが、その時はまだ今後のことについて考えるに至らず、保留にしていた。

人との出逢いもそうだが、居場所との出逢いもベストな時期というものがあるようだ。

３月２３日（３）

それにしても、昨今珍しいくらいの仲良し夫婦がそばにいたのに、娘の私はどうして結婚を解消したのだろう。

両親が喧嘩ばかりしていて結婚生活に夢が持てなかったとかではないし、母は専業主婦で家にいて、父も仕事から早く帰ってくるので寂しさを感じた事などなかったし、何よりも愛情を独り占めして満たされて育ってきた。

それなのに、自身の結婚生活を持続させることが出来なかった。離婚は忍耐力の欠如などというが、一度きりの人生、自分を殺してまで耐え抜く意味があるのかという想いが沸点に到達してしまった。

子どもの為に離婚しないという選択もあるが、そう考えたのなら両親の不仲を死ぬまで子どもに悟られるべきではない。自分のせいで親が我慢を強いられたとなると、これもまた子どもを苦しめる要因となるからだ。隠したところで子どもは敏感に察してしまう。

私は自分にも周囲にも嘘をつき通したくなかった。外せない仮面を被った上に成り立つ幸せなどあり得なかった。その状態で突然現れた大きな壁を乗り越える気力が持てなかった。

でも、経済的に弱い方の立場だったから主張できたという状況ではあった。私が守る側の人間で、相手に離婚後の生活を保障してやれないのなら、責任という意味で結婚生活を継続したかもしれない。

子どもは自由にさせた。元の家と新しい家とは目と鼻の先なので、子ども達は基本的にはアパートにいるものの、二つの家を都合のいいように行き来している。結果、離婚前より父子の関係が密になったように感じる。時に共感したり、時に反発したり。以前は父子でどこかに出掛けたり、日常の会話というものがあまりなかった。結果往来だと思うことが、この離婚では多々あるのだ。

独身に戻った今でも、両親のような老後には憧れる。

だが、結婚が人生の幸せと直結しているかというと、それは違うと思う。離婚や一生独身でいる事が不幸だというのも思い込みだ。どちらを選んでも、得られるものと得られないものがある。どちらにもプラスとマイナスがあるのだ。

故にうちの子ども達には、結婚してもしなくても自分を大切にする人生を送ってほしい。ただし、子ども達が私の持論を蹴飛ばす勢いを持つことは大歓迎である。

４月１３日（１）

　最後の退院。私は自宅アパートにいた。

　すると母から電話があり、介護タクシーで帰宅したが、鍵を無くして家に入れないという。合鍵を持っている私は急遽、車を飛ばした。

　団地に到着し、私は三階と四階との間の踊り場まで一気に駆け上がった。そこから四階を見上げると、実家の隣家の玄関ドアが開き、母と目が合った。残りの七段を上り、玄関の中を覗く。すると、父が車椅子に座った状態で玄関ホールにいた。

「ごめんなさい！　ありがとうございました！」

　私は隣人である金井さんに礼を言った。母と同年代の金井さんは廊下に座り、話し相手になってくれていた。

「いいのよ」

　そう言ってにこやかに笑う金井さんにもう一度頭を下げ、私は実家玄関の鍵を開けた。

　金井さんが留守でなくて本当に助かった。四月とはいえ、少し冷え込んでいたこの日、もしも金井さんが留守だったらどうなっていただろうか。運転手さんのことだから、ワゴンで待機させる為にもう一度車椅子を一階に降ろすか、毛布を車からたんまり持ってくるなどして動いてくれただろう。そんなことをさせずに済んでよかった。

　だが、運転手さんを待たせたことには変わらないので平謝りすると、次の仕事が入っていないから大丈夫と、いつものごとく優しかった。

　母に話を聞くと、財布に入れていた鍵を小銭を払う際に落としてしまったらしい。車椅子を四階まで上げてもらった後、ないことに気づいたという。

　母は昔から財布に鍵を入れておく習慣があるのだが、落としたのは初めてだった。日頃からおっちょこちょいなところはあるが、共に行動していた運転手さんに気を遣い、慌てていたのかもしれない。

　そんな中、救われることが多々あり、何かに守られていると思わずにはいられなかった。

夕方、手配通り、往診の先生が来てくださった。三島先生という在宅医療専門の内科医だ。三島先生は四十代の男性で恰幅が良く、丁寧でゆったりとした口調で話す。

三島先生と一緒に小西さんという女性が同行していた。小西さんは医療相談員で、父のテンションが上がりそうなくらい可愛らしい雰囲気を醸し出していた。

私は小西さんを見て、思わず「父、若い女の人が好きだから喜びます！」と言ってしまった。今思えば、ホステスではないのだから失礼極まりなかったが、父の日常に花を添えてもらえそうな期待感が瞬間的に膨れ上がったのだ。

後に、施設の中で私と一番近い存在になった小西さんなのだが、彼女は嫌な顔一つせず、「本当ですか？」と笑ってくれた。

父が診察を受けている間、小西さんは壁に飾っていた一枚の写真に注目した。

４月１３日（２）

「いい写真ですね」

　桜が咲いていた頃に、大学病院内を車椅子で散歩した時のものだ。桜の木の下で、患者さん数人と看護師さん数人が集合して写っている。

「散歩するのが好きなんですよ。でも、団地にはエレベーターがないから難しくなっちゃいましたけど」

　特に何か伝えたかった訳でもなく、私は呟きに近い調子で言った。すると、小西さんの口から、「うちのスタッフを使ってください！」という言葉が返って来た。

　訪問診療のステーションと併設して、デイサービスを行っている施設があるという。よく知られる比較的軽度の人が利用する大規模なデイとは違い、がんなどの病気で終末期の人や、医療依存のある人が利用できるデイだ。家族が休養を取りたい時などに利用できるショートステイも受け付けている。

　小西さんがスタッフと言ったのは、そこで働く介護士さんのことだ。

「若くて力持ちのスタッフがいますから！　車椅子、下まで降ろしますよ」

　小西さんはそう言ってくれた。

　私は父が寝たきりになった時点で、「父と外で楽しむ日々は終わったんだ」と思っていた。父を外出させるのは、通院などやむを得ない場合しかなく、散歩などの娯楽で連れ出すなど不可能なことだと決めつけていた。

　それを可能にしてくれるという。

　でも、この話を最初に聞いた時、私は誤解した。デイを利用するということは全く頭になく、自宅の周りを散歩するのに、介護士さんが出向いてくれるのか？　と、ピント外れの事を考えていたのだ。

　また、デイの写真付きのパンフレットを見せてもらったにも関わらず、デイサービスというと、ある程度動ける人が利用するものという先入観があり、寝たきりの父がどういった形でデイを利用するのかイメージが湧かなかった。

そういった諸々の理由で、すぐにデイサービスを利用するということに結び付かなかった。

母も、「退院してきたばかりなので、少し家でゆっくりします」と、小西さんに告げた。

４月１３日（３）

父は訪問診療の他に、訪問看護とヘルパーさんによる介護、訪問入浴を利用した。

私は訪問入浴を見学することは出来なかったのだが、入浴後に介護士さんが小さな鯉のぼりを持って父に寄り添う楽しげな写真を残してくれた。

ヘルパー研修で、私は足浴とベッド上で髪を洗う実習を経験したのだが、受ける側は本当に気持ちがいい。入浴して全身お湯につかった父は、きっと心までほぐれていたに違いない。

四月の頃の父は、寝たきりという以外、会話もしっかりしていて元気だった。私が息子のことを相談すると、浅くではあったがアドバイスもしてくれた。

でも、携帯電話やラジオなどの操作は出来なくなっていた。幾度となく教えたが、短縮ダイヤルを使っても、その三つのボタンの押す順番が覚えられない。母は機械類が全くダメだ。紙に操作方法を書いておいたが母は教えられなかったらしく、結局父は誰にも電話を掛けられずじまいだった。

父や周囲の人の気持ちを汲めなかったことの一つとして『会話』がある。

亡くなった時、父の会社員時代の友人が家まで来てくれた。父の携帯の一番近い履歴にも残っていた佐々木さんだ。佐々木さんは「お父さん、私のことで何か言ってませんでしたか？」と訊いてきた。私は何も答えられなかった。

父は佐々木さんのことを私に話さなかった。でも本当に仲が良く、カラオケをしたり旅行に行ったりと密に交流があったようだ。

団地の作業員さん達も、葬儀の場で「お見舞いに行きたかったが、迷惑になるからと遠慮していた」と言った。父は、覗き込むことのできない窓の下から作業員さんの声がする度、耳をすませていたという。両者の様子を知り、私は深く悔やんだ。

身内としては、寝たきりの父に訪問者があることは喜ばしいことなのだ。誰か来てくれないかと待っていたくらいだった。だが、家族が声に出さない限り、外部の人からしたら様子がわからず遠慮してしまうだろう。逆の立場に立てはすぐにわかることを、私は考えもしなかった。

[illegible]

　佐々木さんも作業員さん達も父も、お互いに会話を求めていた。生きていた頃に気づけなかったのだから仕方がないが、後に気づくことは数限りない。

５月２８日

医療保険金の申請に必要な書類を大学病院に取りに行こうとしていた時の事だ。

在宅医療に切り替えたので、父がこの病院に通院することはもうない。そんな父に「行ってくるね」と声を掛けると、父は思いがけないことを口にした。

「一緒に行かなくていいのか？」

私は一瞬、ドキリとした。

在宅で診察を受けているとはいえ、治療をするわけでもないし、抗がん剤もストップしている。それを疑問に思い、そう言ったのだろうか。それとも、退院してきて一カ月経っていたので、定期通院の頃だと勘違いしたのだろうか。とりあえず私は、

「今日は診察がないから、私だけ行ってくるよ」

と、声のトーンを上げて父に伝えた。父はそれ以上何も問わず、「そうか」と言って笑った。

この頃の父は、右手の浮腫が酷くなり、指を曲げたまま広げることが出来なくなっていた。何もしなかったら、そのまま硬直してしまいそうだった。

でも、握ったままの手から腕を肩の方に向かって何度も軽く揉んでいると、徐々にむくみが引いていく。更に、指を広げる方向に一本ずつ少しだけ力を入れながら揉むと、三十分後くらいには手を広げた状態で保てるようになった。

「ほうら、広がったでしょ？」

開いた手の平を下にしてベッドに置き、私は達成感いっぱいで父に語り掛けた。すると父は、「ホントだな」という代わりに満面の笑みを浮かべた。

私はその笑顔を見た途端、涙腺が緩んでしまった。なぜか、これまでの笑顔とは違うものを感じたのだ。衝撃だった。私は涙が頬を伝う前に、慌てて洗面所に駆け込んだ。

その時から亡くなるまでの一カ月間、何度、父の笑顔に泣かされたことか。また、介護施設実習でも、利用者さん達の父と同じような笑顔にたくさん出逢った。その度に、涙を零さないように

するのが大変だった。

　これは、悲しいとか辛いとか、そんな涙ではない。清らかで温かいものに触れた時の浄化される感覚とでもいうのだろうか。とにかく、否応なく心を溶かされてしまうのだ。

　ただ、父の前では絶対に泣かなかった。それこそ、「何で泣くんだ」と不安にさせかねない。いつも懸命に堪えていたのだが、限界になることしばしば、長居が出来ないことがよくあった。

　だから、父の笑顔を見るのが苦手な時期でもあった。

６月２日

往診医の三島先生が母と私に話があると言った。父に聞こえてしまうとまずいので、ステーション（施設）に来てもらえないかという。ワゴンで迎えに行くということなので、家族三人で訪問した。

迎えに来てくれたのは、男女三人の若いスタッフさんだった。

女性はいつも来てくれている相談員の小西さん。男性のうちの一人は背が高いだけでなく、「声がやたらとでかい」と、会う度に私がからかっていた奥田さんでデイの所長だ。もう一人の男性は岸谷さんといって、やはりにこやかで明るく、音大卒のサックス吹きだということが後に判明した。共に三十歳前後に見える。

三人ともノリが良く、部屋の中が途端に賑やかになった。一人になると暗くなりがちな私のテンションも一気に上がる。

父は二カ月振りの車椅子に乗った。そして、奥田さんと岸谷さんが車椅子をしっかりと支えながら一階まで降ろしてくれた。父は体調が良かったのでストレッチャーには移らず、座った姿勢のままワゴンに乗った。

ワイワイと遠足気分である。施設は車で七、八分くらいの距離にあった。

車を降り、建物の中に入る。一階ロビーから廊下を少し奥に入ると、正面に在宅療養支援のステーションがあり、右の扉を入っていくとデイサービスを行うスペースがある。私達はそちらに通された。

全体に木目色した室内で、南国を思わせるような家具や観葉植物が置かれている。広いお洒落なリビングの中央にガラステーブルやゆったりとくつろげるソファーがあり、そこに座って楽しめるようにテレビや音響設備が配置されている。リビングの両サイドには、ホテルにありそうなサイドテーブル付きのベッドが二台ずつ、隣が全く気にならないしっかりとした壁で間仕切りされていた。

リビングの奥の扉を抜けると、カフェのようなダイニングキッチンがあった。八人で囲めるテーブルや簡単な調理が出来るカウンターキッチン。業務用のコーヒーメーカーまである。先生が往診中ということで、待つ間にさっそくコーヒーを出してもらった。父も車椅子でテーブルにつき、家族三人で喫茶店にでも来たようだった。

ダイニングに入る手前に電子ピアノがあり、ギターとサックスも置いてあった。それが気になっ

ていた私は、「演奏なさるんですか？」と訊いた。すると、所長の奥田さんが、

「いいフリ、してくださいましたねー」

　と言って、ギターを手に取った。そして、サックスの岸谷さんと共に『川の流れのように』を演奏してくれた。二人ともレベルが高い。正直、思っていた以上だった。私はお世辞では褒めない。

　感動に浸りながら拍手をしていたら、三島先生が戻ってきた。母と私は別室に案内され、父はベッドで休ませてもらった。

　三島先生は母と私に、

「この先、絶対に家族だけで抱え込まないで何でも相談してください。家にこもり切りだと本人がうつ状態になる可能性があるから、週に一度でも通所すると気分転換になるかもしれません」

　と言った。

　寝たきりの状態でもゆっくりとくつろげることがイメージできたし、パワフルなスタッフさんばかりなので元気をダイレクトにもらえそうだと思った。父の反応も良かった。母の為にもなる気がした。実家に私が行ったところで、目の前に世話する相手がいると母は休まない。物理的に介護から離れる必要があった。それに、何よりも父を再び散歩に連れ出したいという願いが叶えられる。家族も一緒に来所していいという。

　それらの理由で、来週からデイに通う手続きをした。私も同行することにした。何か楽しいことが待っていそうで、父の付き添いというより私が参加してみたかった、と言った方が正解だ。

　下世話な話だが、これだけの手厚いサービスを受けるとなると金額的に高いのではないかと考えてしまいがちだが、受け入れ人数が三倍くらいあるデイサービスと大差ない。何百円しか利用料は変わらないのだ。

　定員は十名だが、平日父が通っていた日に限ってはせいぜいベッドが埋まる程度（二〇一二年当時）。介護士さんや看護師さんに一対一以上の介護を受けられた。

　もちろん、父ほど重度でなくても利用できる。家庭菜園を楽しんだり、キャッチボールをしたり

、日曜大工的なこともしたり……。家族の出入りも自由なので、第二の家というのに相応しい施設だ。

６月８日（１）

デイサービス初回。父を迎えに来てもらい、私は自分の車で付いていった。

ワゴンに同乗しても良かったのだが、途中で退席した方がいい雰囲気になった時、すぐに動けるようにしたかった。身内がべったりくっついていたら働く側の人達がやりづらくないかとか、家族が付き添わない利用者さんに寂しい思いをさせないかという懸念があったからだ。そんな心配などいらない場所だったのだが、初めての場所ではどうしてもいろいろと考えあぐねる。

到着後、ダイニングでコーヒーをいただいた後、父はベッドでゆっくりと過ごした。私がいたせいか、普段眠っていることの多い父はずっと目を覚ましていた。でも、話すことなどすぐに尽きる。手持ち無沙汰の私は父の右手をマッサージし、むくみを取ることに意識を向けた。デイも午前中はゆったりと過ごす時間にあてているようで、部屋全体が静かだった。

十二時になる少し前から、介護士さんが父の様子を伺い始めた。昼食をダイニングテーブルでとるかどうかを聞かれる。辛ければベッドでもいいという。父はダイニングで食べると意思表示した。昼を少し過ぎた頃、車椅子に座らせてもらってダイニングに移動。一緒にテーブルに着くと、私の分も用意してくれていた。

父は半分ほど自力で食べたが、腕を口元まで上げるのが徐々に辛くなってくるようだった。手が止まり、疲れた様子を見せた後は、私や看護師さんが介助した。残り少々というところで尻が痛くなったと顔をしかめたので、介護士さんにベッドに戻してもらった。

午後はレクリエーションの時間だ。今日はカラオケ大会が開催される模様。介護士さん達はリクエストを聞きつつ、好まれそうな曲をピックアップし、大きな文字で印刷した歌詞カードを配る。

その中に『ここに幸あり』という曲があった。他の曲は歌詞を目で追うだけだった父が、しっかりとした声で歌い始めた。昔、誰かの結婚式で歌ったらしい。

この時期、父は蚊の鳴くような声しか出せなくなっていた。話すことが億劫だとも言っていた。それなのに一曲全部歌った父を見て、音楽は失いかけていた力を引き出すものなのかと、しみじみ思った。

カラオケの後は電子ピアノやサックスの演奏に聴き入った。

ここで働く方々は、なぜか楽器を演奏することに長けている。思わず、「ここの採用基準は、楽器が弾ける人ですか？」と聞いてしまったくらいだ。そんなことを知らない時に、「私もクラ

リネットを吹いていたことがあるんですよ」と口走り、私が施設に顔を出す度に「クラ、持ってきましたか？」と聞かれ、冷や汗を掻いていた。

　サックスで演歌を吹いてもらっていた時、父が「生（演奏）か？」と興味を示した。

　ベッドの背を少しだけ起こしながら、サックスを吹いていた岸谷さんに「生かって言うんで（吹いているところを見せようと思った）」と言ったら、座っていた椅子ごと移動してそばに来てくれた。

　耳だけではなく、体全部で音の振動を感じる。ＣＤではなかなか体感できない経験だ。親子して物凄く癒された。音楽はやはりライブがいい。

　デイ終了までの間、スタッフの方々の元気な声に、父も私も終始笑顔だった。

６月８日（２）

　帰宅後、ハプニングが起きた。

　施設から父はワゴンで、私は自分の車で、まもなく実家に着くという時のことだ。棟の前に車が止まっている。狭い道なので前に進めない。既にその道に頭を突っ込んでいた私は少々バックして、この道に並列した駐車場の中を通ろうとした。

　すると、私の車の脇に立っていた通りすがりのおじさんが、車を指して何か言っているのが見えた。バックした時に触れてしまったか。私は恐る恐る窓を開ける。

「タイヤがパンクしてるよ」

　おじさんはボソッとそう告げた。

　慌てて車から降りて確認すると、右後ろのタイヤが見事に潰れている。

「わぁー、ホントだ、すみません！　ありがとうございます！」

　私はパニックに陥りながらおじさんに礼を言った。ゆっくりと車を走らせ、実家の階段近くの停車場所に車を止める。

　実家に戻ると、父を送ってくれた奥田さんと副所長の池内さん（やはり三十代の男性。私と同世代のスタッフさんもいるのだが、この施設は若者がリーダーシップを取っている）は、既に父をベッドに寝かせてくれていた。

　私は心ここにあらずのまま、奥田さんと池内さんに今日のお礼やたわいもない話をした。そして、玄関で二人を見送る時、藁にもすがる思いで「あの、関係ない話なんですけど」と切り出した。

「タイヤがパンクした時、どこに持っていけばいいんでしたっけ……」

　私の情けない声に奥田さんは、「ここと か、ここと か……」と教えてくれた後、「ちょっと見てみますよ」と言った。

　一緒に階段を降り、パンクしたタイヤを前にすると、「スタンドに連絡して来てもらって……出張料とか取られるかもしれないですけど……」と説明してくれた。

この近くで連絡するスタンドが思い浮かばない私は、「アパートまで（パンクしたまま）乗っていけますか？」と訊いた。

私が無謀なことを言った自覚を持たずにいると、奥田さんは「それは危険ですよぉ。スペアタイヤありますか？　実は昔、スタンドで働いてたことがあるんです」と言うや否や、車のトランクを覗いて工具を取り出した。

さすがにそこまで頼もうとは思っていなかった私は、「時間、大丈夫なんですか？」と聞くと、奥田さんは「大丈夫です！」とニコリと笑った。

二人は介護士から整備士へと早変わりした。送迎車から介護用のゴム手袋を取り出し、手際良くタイヤを交換してくれた。タイヤ交換の工程がわかっていたとしても、ネジがかなり固く締めてあったので、私の力では外せなかっただろう。さすが男性。本当に助かった。

ひたすら頭を下げて礼を言うと、池内さんはいつもの控え目な笑顔で、奥田さんはいつもの大きな声で一笑して帰っていった。

母にはもちろん、「何、させてんの」と、怒られた。

６月１５日（１）

週に一度のデイサービス二回目。

前回、午前中は静かに過ごす時間とわかったので、私は昼から参加。父は既に昼食を済ませていた。午後は近くの池に菖蒲を見に行く為、体力温存という事でベッドで介助してもらいながら食べたという。

訪れようとしている池は薬師池という公園だ。日本の歴史公園百選にも選ばれている。私達家族は、町田に越してきた四十年前から度々訪れていた。

現在のように公園化されていない頃、父は幼い私を連れて池で釣りを楽しんだ。釣竿を持参することもあったが、生えている笹を折り、落ちている釣り糸と針を付け、ミミズをほじくりだすなど現地調達することもあった。私が独立した後は、夫婦で季節の花々を見ながら散策していたようだ。

先週のデイで、その薬師池に行こうという話が出た。父も笑顔で答えていた。

だが、一週間前に比べ、父の状態は明らかに悪化していた。本来なら外出などとんでもなく無茶な状況だ。ただ、このデイを利用した最大の理由は『父をもう一度、散歩させたい』。それが私とスタッフさん達の共通の想いだった。

散歩に行くのは今日がラストチャンスかもしれない。

心の中で私が思っていたことを、スタッフさん達も考えていた。

後に聞いたことだが、午前中、顔色の優れない父に気遣いながら、介護士の田山さんが父と話をしてくれていた。田山さんは私に年齢の近い物腰柔らかな女性で、キーボードで即興伴奏してしまう特技を持っている。

田山さんが何を話しても、父は初め、「うーん……」と力なく返事するばかりだったそうだ。少し時間を置き、田山さんは昼食をとった父にもう一度問い掛けた。

その中で田山さんは「薬師池に行く勇気、ありますか？」と質問したという。すると父は「勇気、あります」と、しっかり答えたらしい。

勇気という言葉が田山さんの口から自然と出てしまう程、父の容体は散歩とは程遠い状態だった。

だが、それを受けて父が「勇気、あります」と答えたのは、私が四月頃から「外に連れていきたい」と、何度もしつこく周りの人に言っていたのを見ていたからではないだろうかと思った。「わがまま娘の願いを叶えてやるかな」という想いが、父の心のどこかにあったのではないだろうかと思うのだ。

父自身が散歩に行きたいというより、娘の願いを叶えようとする力。

それが、この日の父を突き動かしていたのではないだろうかと、田山さんとのやり取りを聞いて思った。

６月１５日（２）

田山さんと父の会話の直後、私は施設に到着した。

スタッフさん達に挨拶した後、父のベッドサイドへ行く。「来たよー」と声を掛けると、父はいつものようににっこりと笑った。

この時点での父は、さほど具合悪そうには見えなかった。だから私は能天気に、「薬師池行こうね」と、ウキウキと声を掛けていた。ぐったりしていたらさすがに散歩を辞退する。そのくらい元気そうだったのだ。

父は車椅子に座らせてもらい、もう一人の利用者のおじさまと介護士さん二人と私の五人でワゴン車に乗り込んだ。いざ出発。十分ほどのドライブだ。

薬師池に着くと、梅雨の晴れ間のせいか、市内から集まった介護施設の車で駐車場は混み合っていた。

歩いていてすれ違うのは、その関係者ばかり。さながら、おじいちゃん、おばあちゃんの遠足だ。その中をゆっくりと進み、時々立ち止まっては様々な種類の菖蒲を眺めたり、写真撮影をしたりした。

父はというと今一つ表情が冴えない。話し掛けても笑顔が出ないのだ。何か、おかしい。写真を撮る時だけ、やっとのことで顔を上げる。介護士さんも父の異変に気づき、「もう、帰りましょうか」と、公園の奥まで行くことなく引き返した。

車に乗り込み、公園駐車場を出て程なく、父は下を向いて小さく唸り声を上げ始めた。

私と介護士さんが目を合わせ、「ちょっと、変だね」と気を張り詰めると同時に、父は手を小さく痙攣させ始めた。白目をむいて意識を失い、全身に汗をかいている。むくんで熱を持っていた手はひんやりと冷たい。その間、一、二分。幸い、施設に着く頃には目を開け、意識を取り戻した。

すぐにベッドに寝かせてもらい、先生の指示で足を高くして、頭と心臓の高さを同じにした。迷走神経が活発になった（何らかの刺激で自律神経のバランスが崩れ、末端の血管が拡張して血圧が下がり、脳貧血になること）とのことで、一時間もすると顔に赤みが戻って来た。

介護士さん達は「疲れさせてしまい申し訳ありません」と謝罪してくれた。

　でも、私は逆に感謝していた。父をもう一度外に連れ出したいという願いを叶えてくれたのだから、ありがとうの想いしかない。父の状態からして、どこへ行くにしてもリスクは当然伴うことなのだ。「何かあったら責任取れない」と、私の申し出を拒否してもいいくらいなのに、一生懸命私達の為に尽力してくれた。

　連れ出してくれた介護士さんが神妙な顔をしていたので、自分を責めなければいいなと思った。

６月１５日（３）

　既にデイ終了の時間だったが、「少し休んでいただいてから送ります」と言ってもらっていた。緊迫した空気は既に緩んでいる。

　私は父のベッドの横の椅子に座っていた。すると、リビングの真ん中で奥田さんを中心に何やら話しているのが見えた。聞き耳を立てると、奥田さんが作った曲の歌詞についての話題だった。

　この曲は施設のテーマとして作ったものだといって、先週初めて聴かせてもらっていた。私好みのラブソングだ。奥田さんの柔らかな通る声で歌われたこともあり、聴きながらうっとりしてしまう、そんな曲だった。

　それなのに、歌詞を作り直したという。その歌詞を書いた紙を見せてもらうと、ラブソングとは程遠い、なんとなく硬さのある詩になっていた。そこにあるはずの想いが感じられない。

　私は思わず、「どうして変えちゃったんですか？　前の方が良かったのに！」と叫んでしまった。
「『諦めていた想いを　キミと叶えたいよ　もう一度』がなくなってるじゃないですか。一番、好きな部分だったのに」

　私が奥田さんに食って掛かると、「それ、実はボクも気に入ってたんですよ」と小声で言った。個人的なものなら問題はなかったのだろうが、『施設のテーマソング』と銘打っていた為に、ある場所からチェックが入ったらしい。

　元々の歌詞は奥田さんの温かさが存分に表現されていて、奥田さん曰く、ごく自然に頭に浮かんだことを一気に書き綴ったとのことだった。俗にいう、「降りてきた」状態だったのだろう。穏やかな日常の風景がありありと浮かんでくる生きた詩だった。

「ぜーったい、元の方がいいです。こっちは全く伝わってこない。光信（父）の娘が言ってたって伝えていいですから、元の方に戻してください」

　私は修正に断固反対した。奥田さんは「こっち（直した方）も僕が作ったんで複雑なんですけど……」と苦笑いしていた。私は何様だ。

　だが、ラブソングというのが引っ掛かっているらしいので、「愛に年齢は関係ないですから！」と付け足すと、奥田さんも「そうですよね」と共感してくれた。

父は生粋の日本男児なのだが、「愛してるよー」と平気で言える人だった。父より若い私は、思っていても恥ずかしくて口に出せない。

数週間前にも何の話の流れか、自宅ベッドの父を囲んで母と三人でサンドイッチを頬張っていた時、父が私に向かって「愛してるよー」と言った。私は照れ隠しに「ふんっ」と一笑。自分の奥さんに言いなさいとさえ思っていた。

このように、愛情表現の仕方は若者より年配の人の方が豊かな場合もある。もちろん、逆も然り。言葉ではなかなか伝えられなくて態度で示すこともある。ということで、愛に年齢は関係ないのだ。

昔流れていた食器洗剤のＣＭで、おじいちゃんおばあちゃんが手を繋いでスキップしているシーンがあったが、あれは幻想ではないとうちの夫婦を見ていると思う。

現在、奥田さんが作ったこの歌は、ラブソングのまま素敵なアレンジが付けられ、いろいろな場面で歌われている。

６月１８日

　脳の影響なのか。昨日まで出来ていたことが今日には出来なくなっている。

　父は物を飲み込むことが困難になった。水でも食べ物でも、口の中に入れた後、どうやって飲み込むのかを数秒考えるような間がある。やっとというより、何かの拍子にたまたま飲み込んで、本人の意思ではないというように驚いた顔をする。または、喉に痛みの走ったような苦痛を見せる。

　往診時、先生の指示の元、食事を取るのを止めることになった。チューブ等での栄養補給は予定せず。ストローで水分補給は出来ていたが、足りるほどは飲めてない。

　これが意味することを誰も口にしなかった。この時の私は、納得も反論もせず、ただあるがままを聞き入れているようで、現実感がないといった曖昧な心境だった。

　夜、家族だけになった時。

　ほとんど話をしなくなった父が掠れた声で言った。しかも、笑顔で。

「もうすぐ、お迎えが来ちゃうから」

　栄養補給の点滴をしないなどの話は声に出していた訳ではないので、父はどういう状況に置かれているか知らないはずである。それなのに、父は突然、穏やかな表情でそう言った。

　人は死を悟ると、自分の死期がわかるという。自死ではなく自然死のことだ。

　家族や身近な人に、「私、いついつ死ぬよ」と言って、身の回りを整理したり体を清めたりした後、自分で布団を敷いて寝床に入り、そのまま昏睡に陥ったという話も一つや二つではないらしい。私の父も十二日後のことを悟り、受け入れたことでそう口に出したのだろうか。

　私は「何、言ってんの」と、はぐらかした。その後、三日間父に会わずにいた私が聞き取れた最後の言葉となった。

６月２１日（１）

　ストローでの水分摂取も難しくなり、漏斗で口を濡らす程度となる。

　痙攣止めの薬と痛み止め（経口薬）を中止。皮膚に貼る麻薬性鎮痛剤はそのまま続ける。その効果か、父は亡くなる数日前まで酷い痛みを訴えることはなかった。

　三十九度の発熱。座薬を入れる。熱、下がらず。午前の往診時、点滴せず。

　点滴を全くしないということは、おそらく先生の考えとして、延命治療をしない方針の一貫だったのだと思う。実際、終末期の患者に点滴をすると、浮腫や腹水などの弊害があるなど、かえって苦しみを与えてしまうらしい。その観点では私達家族も理解できる。

　でも、私の数少ない知識の中に、脱水状態になると発熱し、水分を十分に補給すると解熱するというものがあった。私の娘が二歳の時に肺炎と脱水を起こし、何日も下がらなかった熱が点滴した途端に下がった経緯を見ていたからだ。

　父は食事を止めた時と違い、明らかに苦しんでいる。熱は脱水が改善されればきっと下がる。私の中でそんな想いが湧き起り、先生と入れ替わりで来ていた看護師さんに訴えた。

「あの……、点滴はしないんでしょうか……」

　医療に詳しくない者が、専門家に口出しするのには勇気がいる。でも、父と意思の疎通が出来る段階で何も処置しないのは、それこそ見放した感が伝わってしまう。酷だ。

　看護師さんは私の気持ちを汲み取ってくれた。

「先生に、電話で話してみますね」

　父のベッドの脇ですぐに電話を掛けてくれた。そのおかげで、抗生物質と水分補給の点滴をしてもらえることになった。

　以前、大学病院の先生に、発熱を繰り返すかもしれないと言われていたので、熱が下がらないのは脱水だけが原因ではないという見解はあった。だが、処置をすることにより、意識のはっきりしている父に「点滴したから、熱、下がるからね」と、励ますことが出来る。精神的なケアにはなるはずだ。

死を間近にし、本人が悟っていたにしても、今この瞬間を生きていることに変わりない。呼吸が止まるその時まで、何かを感じながら生きているのだ。苦痛を伴う時間は、ガンほどの病気を患わなくても辛く、長い。その一分一秒を、私は父にほんの少しでも楽になって欲しかった。

６月２１日（２）

　家庭で点滴をするということは、薬剤交換作業や滴下調整を家族が行うということに繋がる。母と私は看護師さんの説明を緊張しながら聞いた。

　点滴の管から血管に空気が入ると大変なことになるという、どこからか仕入れてきた記憶が私を神経質にする。無くなるまでに数時間は掛かる点滴を、数分ごとに眺めたり、ぽとぽとと落ちる量を微調整したりした。神経を尖らせていた反面、点滴交換できるようになったと、私は半分看護婦さん気取りでもあった。

　私が自宅アパートに戻っている間に点滴がなくなり、母が交換した時のことだ。

「管の中にも（液体が）なくなってたんだけど替えたわよ」

　実家に戻り、その言葉を聞いて私は焦った。

「管の中が空っぽ状態」のまま、「新たな点滴を追加」した……。

　ということは、管の中の空気を血管の中に押し込んだということになる。私は母に「空っぽだったら、点滴追加しちゃダメじゃん！」と、怒鳴った。その勢いで看護師さんに連絡を取る。

　すぐに看護師さんが様子を見に来てくださった。だが、父の体内に空気がどのくらい入ったかなど見た目ではわからない。看護師さんは、

「入ってしまったものはどうしようもないですもんね」

　と言い、少しくらいの空気なら血管の中で消えちゃいますと補足した。父にも異変は起きていない。

　看護師さんの笑顔に、老老介護で疲れている母に声を荒げてしまったことを反省した。

　多量の薬の管理だけでも大変なのに、点滴が加わったら休まる暇がない。痰を吸い出すための吸引器もあり、管をあまり奥まで入れなかったようだが、母はこれも操作していた。熱を和らげようとアイスノンを交換したり、座薬を入れたり。夜中は父の息遣いが気になって眠れなかったりしたのだから、何もかも完璧を求めるのは無理な話だ。

　私はこの日で仕事を辞めることになっていたので、これからは出来る限り実家にいて、父と母の介護生活にのんびり付き合おうと思っていた。

６月２５日

　父が目を開けている。

「あーあーあーあー……」

　母と私をじっと見て、何かを伝えようとしている。でも、もう言葉を発することが出来ない。苦しいという表情ではない。

「んー？」

　何度か聞き返したが、「あーあー」というばかり。母も「なんて言ってるのかしら……」と首を傾げる。

　私には先日父が発した「もうお迎えが来るから」の言葉が頭に残っていた。その為、家族が聞き取らない方がいい言葉を言っているのではないかという恐怖があった。だから、何度か聞き直したものの、わかるまで追求することが出来なかった。

　今考えると、父は会話が出来ていた頃、私がアパートに帰ろうとする度に「ありがとうね」と言っていたので、自分の意識のあるうちに、「ありがとう」と言いたかったのかもしれない。

　私はよく、勝手に解釈するので、「違うよ」という父の声が背後から聞こえてきそうだが。

６月２６日

熱は依然としてあったものの、デイサービスを利用する。

母を休ませるという目的もあったが、何より父が「デイに行く」と意思表示していた。前夜に看護師さんが電話で、「熱があるから無理と言ってしまうと、もう来れなくなると思います。奥様にも休んでいただきたいので」と後押ししてくれたのもある。

移動には危険が伴う。医師からも、「移動途中で急変したり、デイに行ってから何が起きるかわからない」という説明は受けていた。母は不安を拭えなかったようだが、父の希望を叶えたいと伝えていた。

ただ、リスクを負ってでも父を預けようという思いになれたのは、先生や看護師さんが常駐し、何かあってもすぐに処置してもらえるという安心感があったからだ。

父の弟夫婦が群馬から見舞いに訪れたので、直接施設に行ってもらった。父を囲み、一緒にサックスの演奏を楽しんだ。集合写真も撮った。

叔父達は初め、五日後の七月一日に来ると言っていたのだが、今日に予定を変更したとのことだった。虫の知らせだったのかもしれない。

夜、自宅にて。痛みを訴えるようになる。

父は座薬を入れても痛みが治まらなかった。時々、息を吸い込んだまま止めてしまい、吐き出すという行為が難しくなる。見るからに苦しそうだ。

いつまで続くかわからない苦痛は父にとって恐怖だったろう。私は、父の不安を少しでも和らげるために、看護師さんに電話して指示を仰いだ。

一旦、電話を切って待つこと数分。四、五時間は空けないといけない座薬を一時間おきに入れていいと言われた。座薬は痛み止めと解熱剤の二種類。それを交互に入れていいと言う。

電話を切ってから、私は父の元に戻り、「座薬、もっと入れていいって言われたから、もう大丈夫だからね」と投げ掛けた。

一瞬、表情が緩んだようにも見えたが、なかなか痛みが治まらない。父の意識ははっきりして

いて、呼吸が止まる度に私を不安げに見る。

「痛いね」

「苦しいね」

　そう問い掛ける度、父は「うんうん」と頷く。

　二時間が経過する頃、父はようやく眠ることが出来た。私は母に「また、明日来るから」と告げ、子ども達の待つアパートに帰った。

６月２７日（１）

　午前七時、父は穏やかに目覚め、母の「おはよう」の声掛けに答える。その三十分後、突然大きな痙攣が始まった。

　午前八時過ぎ、私は母からの電話を受ける。

「痙攣が止まらなくて、今、看護師さんに来てもらってるんだけど、唸り声あげてちょっと様子がおかしいのよ。すぐに来てくれない？」

　子ども達を学校に送り出した後だったので、私はすぐにアパートを飛び出した。

　実家に着くと、父は全身を痙攣させながら「うー、うー……」と呻いている。見開いた目はまばたきをしていない。痙攣が始まってから一時間半。これまで経験した酷い痙攣でもここまで続いたことはない。

　不思議なもので、一見大変な状況でも落ち着き払う時間がある。私はふと、窓から外を見遣った。すると、一人の男性が棟の前に置いた私の車に、駐車禁止の紙を正に貼っている最中だった。

　団地内なので違反切符を切られるわけではないが、緊急車両の妨げになるので、来客は管理事務所に行って来客用の駐車場を借りなければならない。しかし、ここに到着したのは管理事務所が開く前だ。現在、九時半。事務所が開いたと同時に誰かが通報したらしい。

　元々短気な私は、「こんな時に……」と怒り心頭に発した。

「ちょっと、事務所行ってくる！」

　母にそう告げ、車のワイパーに挟まれていた駐禁の紙を掴み取り、事務所に飛んでいった。

「おはようございます！　すみません、うちの棟の前の来客用、空いてますか！」

　いきなりは文句を言わない。でも、語気は荒い。

「これ……」

　私は受け付けてくれた女性に駐禁の紙を見せる。事務所内にいた数人が私に注目する。その

中に、駐禁の紙を貼った男性もいた。私はその男性にも聞こえるように「父が今、大変なんです」と言った。

「光信さん？　具合が悪いって聞いてたけど」

　団地のシルバー作業員であった為、事務所の人は当然父を知っている。

「大きな痙攣起こしてしまって」

　私はそう答えながら、駐車料金を払う。

「お大事にね」

　私は女性に頭を下げ、事務所を後にした。

　実家に戻ると、三島先生が来ていた。痙攣が始まってから三時間が経過。父と目を合わせてみるが、やはりまばたきをせず、見えているのかどうかはわからない。三島先生は私が今到着したと思ったのか、これまでの経過を説明した。

「痙攣止めの注射もありますが、呼吸が止まるリスクがあるんです」

　先生はそう言いながら、母と私に判断を委ねた。

　止まる気配を見せない痙攣を見ている方も辛いし、父も苦しいだろう。家族としての意見は、「リスクは厭わない」だった。

　一回目の接種。痙攣は止まらない。

　数分後、二回目の接種。父は相変わらず、全身をがたがたと揺らし続ける。

　三島先生が母に「（ショートステイするために）施設に連れていきましょう」と告げる。

　痙攣している状態で家族だけになるのは不安が大きかったし、家で看たにしても何かとすぐに電話を入れ、先生や看護師さんにご足労を願うことになるだろう。母は「お願いします」と即答した。

ワゴンで迎えに来てもらう。階段を降りるのに担架は使えず、その代り、父用に改良された車椅子が用意された。背もたれに頭まで寄り掛かれる板を付けたものだ。それを見て、父の為に親身に考えてくださっていることを痛感する。

施設に着いてから、時々痙攣が止まるようになってきた。が、痙攣が起きている時間の方が長い。

夕方になり、三島先生は「点滴はやめましょう」と、母と私に告げた。

６月２７日（２）

　私は元々、延命治療には積極的になれない方だった。自分のことだったら、「延命しないで」と即答できる。だが、家族の事となると話は別だ。今回、家族が延命をしない決意をするタイミングが非常に難しいことを感じた。

　もし、痙攣が起きた後も父の意志をはっきり読み取れたら、点滴による水分補給を止めることなど出来なかったと思う。

　数日前に高熱が出た時には、父の意識ははっきりしていた。延命しないつもりなら、この時点で点滴しないのが普通だろう。だが、この時に点滴をしなかったら、父が「見放された」と思ってしまうのではないかと考えていた。

　痙攣が止まらなくなり、意思の疎通が出来ず、瞼を閉じられなくなり、荒い呼吸をするだけになってしまったことで、私はようやく「父を楽にしてあげてください」と言えたのだ。

　また、先生が「痙攣が治まっても、回復したということではないです」と言っていたのも、決心が付く理由の一つだった。

　後日談だが、病院を選ばなくて良かったと思った事があった。

　私は自分の万が一の時に、延命をしなければ自宅ではなく病院で最期を迎えても構わないと思っていた。

　しかし、父の死後、だいぶ経ってからそんな話をしたら、「入院イコール延命治療をしにきたということになる」と、三島先生や他の医師に言われた。病院で「延命しないでください」とお願いしても、「じゃあどうしてここに来たんですか？」ということになるらしい。

　父のことは三島先生に託していたので、先生の言う通りに施設に動いただけなのだが、「病院に行きます」と言わなくて本当に良かったと思った。（病院が嫌なのではなく、延命をしてほしくないだけである。）

　午後七時、看護師さんがしていたように、私は父の目を湿ったガーゼで押さえていた。少しの間なら目を閉じていられるが、すぐに開いてしまう。

それ以外は状態が落ち着いたので、デイのスタッフさんにお願いして帰宅することにした。

宿泊一日目。ショートステイを利用していたのは父一人だった。

看護師さんが父の腕や足にアロママッサージをしてくれたり、夜勤だった岸谷さんが、父の耳元でずっと歌を歌ってくれたりした。

日頃サックスを吹く岸谷さんは、大学でピアノを専攻していたということで、奥田さん作曲の歌をアレンジして電子ピアノに録音していた。今夜、父の為に何が出来るだろうと考えた末、伴奏を繰り返し流しながら歌を歌ったのだという。

人は亡くなる寸前まで耳は聴こえるらしい。父はきっと、岸谷さんの奏でる音楽に癒されていたに違いない。

６月２８日

　眠れなかったという母をひとまず自宅で待機させ、私一人で施設に向かう。

　到着すると、昨夜使用したアロマオイルを染み込ませた紙コースターと、看護師さんが書いたメッセージを渡された。心温まる施しに感謝の気持ちでいっぱいになる。

　父は痙攣が治まっている時間が長くなり、この半月くらい時々無呼吸になっていた呼吸が荒いながらも安定した。目は依然として開いている。

「閉じようね」

　私はそう言って、父の瞼をしばらくの間、指で押さえていた。それを何度か繰り返すうち、閉じた状態を保てるようになった。

　午前十時過ぎ、施設では通常のデイサービスが始まった。

　その中で過ごさせてもらえたことで、厳密に言えば家ではないが、いつもと変わりない日常の音と空気の中で過ごしている感覚があった。

　いや、家にいたら静まり返った中で、母と二人、いつ急変するかわからない恐怖と戦っていたかもしれない。施設にいればスタッフさん達と会話したり、何かあればすぐに対処してもらえる安心感があり、不安はほとんど抱かなかった。父もいろいろな人の明るい声を聴き、和んでいたのではないかと思う。

　昼になり、スタッフさんが私に昼食を出してくれようとした。だが、さすがに食欲まではいつも通りとはならず、遠慮して一度帰宅する。午後、母を連れて再訪。

　定期的に痙攣止めの注射を打ってもらっていた為、夜になる頃には痙攣が治まった。熱は三七度から三九度をいったりきたり。でも、意識があった頃の苦しそうな呼吸はなく、穏やかな息をしながら眠っている。

　宿泊二日目。夜はベッドが空いているので泊っていってくださいねと言われた。ショートステイ中、家族が不在の時に息を引き取った場合の事を気に掛けてくれたのだ。

　でも、母は「ここだと眠れないから」と断った。その後も何度か同じ質問をされた。後悔のないようにという配慮だということは十分伝わってきたが、それでも父を施設で看てほしいとお願いし続けた。

　母が父を看取りたくないわけがない。四五年間、ずっと仲良く暮らしてきたのだ。最期まで一緒にいたいに決まっている。

　だが、一年間の闘病生活で家族の時間を存分に過ごしてきたし、やり切った思いが母にはあった。私から見ても数か月前から既に疲れ切っていたし、緊迫した状態の父をこれまでの調子で看ていたら、高血圧の母が倒れてしまう。現に、一年の間にかなり体重が落ちた。もう限界だったのだ。

　実際、ショートステイの間、私は施設に行く前に実家に寄って「一緒に行く？」と聞いても、母は「家で休んでる」と答えていた。

　私は子ども達の学校があるので、実家に泊まり込む事は出来ない。中学生だから自分に責任をもって行動するよう託すことは出来たが、父が望まないのではないかと思った。母に関しても同様、脳腫瘍を患うまでは母の代わりに買い物などを手伝っていた父なので、母を無理させることは本望ではないだろう。

　だから、臨終に立ち会えないかもしれないという事に関して、施設にお願いした時点で私も母も全く迷いがなかったのだ。

　また、父が苦しそうに大きな唸り声をあげていたら施設には預けず、病院に移動したかもしれない。デイサービスの時間帯に他の利用者さんに不安を与えてしまうのは、家族として避けたかった。

６月２９日

　全く痙攣が起きなくなった。水分補給をしなくなったせいか、むくんでいた手から水が引く。久しぶりに父の綺麗な手を見た。

　私は父の左手を下からすくうようにして握り締め、携帯で写真を撮った。

　呼吸数は変わらず。短く吸って短く吐く。少し間があり、また短い呼吸。でも、肺までしっかり吸い込んでいて力強い。口が渇かないよう、時折スポンジで湿らす。

　私は、父の足裏を揉みほぐしてみた。ツボを強めに押す。意識があった時はあれほど痛がったのに、もう何も反応しない。

　宿泊三日目。状態が落ち着いていたので、「また、明日ね」と声を掛け、夕方帰宅。

　いつ連絡が入るかわからないので、私は枕元に家の電話の子機と携帯を置いて寝ていた。

　昼間は一時間近く掛かる道のりだが、夜中ならアパートから施設まで三十分掛かるかどうか。だから、何かあった場合、私と母にそれぞれ連絡してもらい、私は施設に直行し、母はタクシーで向かうと決めていた。

６月３０日

　学校が休みだった為、午前中、私は子ども達を連れて父に会いに行った。土曜日だからなのか、デイを利用する方が六人もいて賑やかだった。

　父は前日と変わらない呼吸をしている。

　飲まず食わずで三日間。健康体でもどうにかなってしまうところなのに、なんて生命力の強い人だと思ってしまう冷静な私がいた。

　朝方、尿が出て、排便もしたと看護師さんから報告があった。

　脱水になると尿が出ないと認識していたが、自然に任せた最期には身体から不要なものを出し、綺麗になって死んでいくのかと人体の不思議を感じた。

　昼、実家に行き、昼食をとってから、母と共に施設に戻る。

　午後一時。

　父の様子は変わらず。母は小さく、「お父さん、お話して」と父の耳元で囁く。

　午後二時半。

　力強かった呼吸が弱くなり始める。

　午後三時。

　父は、家族が揃ったことを悟ったのだろうか。

　小さく一回呼吸し、静かになった。数秒後、ゆっくりともう一呼吸。そして、夢の中に入り込むようにして永眠。ふわっと目元を緩めた。どこに行っても「笑顔が忘れられない」と言われた父らしい。

父はもう一つ、タイミングを見計らっていた。デイサービスが終わる時間だ。よくしてくださったデイのスタッフさん全員と、ゆっくりお別れがしたかったのかもしれない。

利用者さんを送って戻って来たスタッフさん達は、父の周りに集まってくれた。清拭し、洋服を着た父を囲み、皆で送ってくれた。

私はこの日が来るのを一年前から覚悟していたし、生きてきた中で一番、父との濃い時間を過ごすことが出来た。だから、父が亡くなって悲しいという心境とは違うものを感じていた。

お疲れさま、とか、楽になれて良かったね、とか、そんな感じだろうか。

私はふと、スタッフさん達に向けて「あの歌、歌ってもらえませんか」とお願いした。

君が笑顔になれば幸せで

ありのままでいいからそのままで

諦めてきた想いを　君と叶えたいよ　もう一度

寝たきりになった父との外出を、団地にエレベーターがないことで諦めていた。

そんな私達家族に、「任せてください」と、力強い手が差し伸べられた。

そのおかげで願いが叶えられ、最期の一カ月を充実させることができた。

この歌は、私達家族の想いそのものだった。

歌の終了と同時にお迎えの車が来た。

玄関で見送られる中、お世話になった施設を後にした。

父、帰宅。五か月ぶりに畳の上に敷いた布団で横になる。

介護用ベッドではなく布団に眠る父を見て、やっといつもの光景に戻ったような気がした。母は心なしホッとしているようだ。父が亡くなった瞬間は号泣していた子ども達も、落ち着いた様子でくつろぐ。

葬儀屋さんが父の顔に白い布を被せ、「休ませてあげましょう」と言った。でも、家族だけになった時、私はちょいちょい布を取って父の顔を眺めていた。敷布団と父の体の間に手を差し込んでみる。まだ温かい。本当に寝ているようにしか見えなかった。

私はしんみりするのが嫌で、父の枕元で缶ビールを開けた。一缶は父に添える。

「ビール、飲んじゃダメかな」

二月にベッドを使うようになったばかりの頃、そう言った父の言葉が浮かぶ。薬の副作用が怖くて飲ませなかったが、一口なら大丈夫だったよなと、ほんの少しだけ思った。

７月４日

火葬場の都合で、父はドライアイスを抱えながら、三日間家で過ごした。不思議なほど色艶のあるいい顔をしている。

子ども達が忌引きで学校を休んだので、亡くなった日からずっと実家に泊っていた。テレビを見たり、お喋りをしたり。布団の脇に線香やらお花やらが供えてある以外、極普通の日常の風景だ。

この間、父の仕事仲間が顔を見に来てくれた。会社員時代の友人、佐々木さんと工藤さんが父との思い出話を語る。団地の作業員さん達も、父と仕事をして本当に楽しかったと言う。涙は出るのだが、自然と笑顔にもなれる。誰が来てもそんな空気が流れていた。

私は、火葬場が空いていなくて良かったと思った。

父がいて、父の友人がいて。その空間でゆったりと過ごすことは、家族にとって気持ちの整理をつけるのに丁度いい時間だった。

私は死後から父の顔を写真に撮っていたのだが、四日目の出発直前、日の光を浴びた父が一番いい顔をしていた。目元は優しく、口角を上げている。亡くなった直後の顔とは明らかに違う。葬儀中、三歳になる親戚の子が「どうして笑っているの？」と言ったくらいなので、気のせいではないと思う。

納棺。父がこの家の玄関を出る最後の日だ。

葬儀場までストレッチャーで運び、現地で父を納める。自宅で棺桶に入れてしまうと、階段を降りられないからだ。

亡くなっているので車椅子ではなく、白い布に包んで葬儀屋さん二人と息子の三人掛かりで下に降ろす。

何度も入退院を繰り返し、家にいないことも多かった父だが、今日を最後にもう二度と帰っては来ない。そう思ったら、途端に寂しくなった。

７月７日

　葬儀は死から一週間後の週末にした。葬儀を土日にした方が、遠方に住む親戚が来やすいからだ。早ければ四日後に行えたのだが、どちらにしても一日は父を保管室に入れなくてはならない。

　保管室。これには少し抵抗があった。

　死んでしまった人間は何も感じないかもしれないが、父を狭くて暗い冷蔵庫に入れてしまうのは、なんとなく忍びなかった。だから、保管室に入れずに済むのなら葬儀を早めたかもしれないが、一日はどうしても入れることになると言われていた。

　案の定、葬儀の日に保管室から出てきた父は、コチコチに凍っていた。顔には白く霜がついている。いかにも不健康そうだ。

　通夜で久しぶりに父と対面した人達は、父の変わりように驚いていた。元気だった頃は多少ふくよかだったので尚更だろう。その様子を見ていた私は、保管室に入る前は顔色が良かったのにと、残念な気持ちになっていた。

７月８日

　告別式も滞りなく進み、出棺前、父は顔だけ出し、色鮮やかな花に埋もれた。飾っていた花を葬儀屋さんがすべて解き、参列者に配ったからだ。父の友人の佐々木さんが、

「光信さん、良いところに行ってね！」

　と、声を掛けたのを聞き、こみ上げるものがあったが堪えた。喪主挨拶を控えていたからだ。

　喪主は母だが、代わりに私が行った。絶対に泣かない、笑顔で挨拶すると決めていた。私は告別式に参列してくださった方を、父に代わって笑顔にしたかった。

「通夜も雨。告別式も雨と、雨男らしい旅立ちだなと思います。笑顔が象徴的な父だったので、私達も笑顔を絶やさず力強く生きていきたいと思っています」

　かしこまった挨拶は物凄く苦手で、台本を作っていかないと話せない私の口から即興で出た言葉だ。会社時代の男性方は神妙な顔を崩さなかったが、私と目が合った女性は微笑んでくださった。

　本当は、「動けなくなるギリギリまで趣味のスロットルを楽しんでいました」と言おうかとも考えていたが、さすがにジョークが通じる雰囲気ではなかった。

　でも、父は最期までギャンブラーだった。

　出棺といっても火葬場は同じ敷地内にあるので、棺桶をストレッチャーに載せて渡り廊下をガラガラと行く。

　火葬窯はいくつかあり、父が入ることになった窯の前で私はふと可笑しくなった。窯の番号が『７』番だったからだ。

　スロットルで『７』を出す出さないで一喜一憂していた数字。さすが父、と思った。

　肉体が焼かれている間、別室に移り、父の遺影を前に献杯した。写真は花見か何かの席で飲んでいた時のもので、父もビールの入ったコップを持っている。一緒に酒を楽しんでいるかのようだった。

火葬を終え、骨を拾う。収骨を行う部屋に通された時は、既に骨は部位ごとに集められていた。私は、父の形のままの状態を見たかったと思った。

父の大腿骨に触れてみる。温かかった。自著の『もういちど伝えたい』の紗織のごとく、のど仏をもらって帰ろうかと思ったが、彼氏じゃないし……と思い、止めた。骨を持っていなくても、私を守ってくれることがわかっているからだ。

その証拠に、後日コンビニのくじを引く際、「コーヒーが飲みたい。父ちゃん、お願い」と念じながら引いたら、コーヒーが当たった。次も「今日は何でもいいや。お願いします」と唱えたら、お茶が当たった。いつも応募券しか当たらないのに。

そんなことが守ってくれている証というのも何だが、父を思い出す時はいつもそばにいるような気がしている。生きている時は離れて暮らしていたので、より身近になった感じだ。

母と子ども達を守っててねと、何かにつけてお願いしやすくなった。あまりに他力本願だと、「おまえがしっかりしろ」と言われそうだが。

父は寝たきりになって四カ月という割と短い闘病生活だったせいか、骨が大きくしっかりしていた。壺からはみ出ている。どうするのかと見ていたら、係りの人は断りを入れた後、壺の中の骨を棒でガシガシと砕き始めた。通例のようだが衝撃的だった。

箸で掴める骨をすべて拾った後、ぐずぐずに崩れてしまった骨を係りの人がほうきで集め、ちりとりで壺に納める。

収骨とは、丁寧さと豪快さと合理性が入り混じったものだと悟った。

帰りのタクシーを待つ間、叔父が話し掛けてきた。五人兄弟の一番末の弟だ。

「一昨日、みっちゃん（父）がおじさん（叔父）のところに来たんだよ。自分が死んだことがまだわからなかったみたい。おじさんがそういうことに詳しいのを知ってるから、聞きに来たんだね」

私はスピリチュアルな話を信じているので、素直に「そうなんだ」と聞き入っていた。

「（先に亡くなった）アニキとお袋と親父のところに行くんだよって伝えたよ」

そんなようなことも言っていた。

あちらで懐かしい人達と再会し、楽しく談笑してくれることを祈るばかりだ。

２０１３年7月２１日（１）

今回、この記事を書くにあたり、もう一度『膠芽腫』について調べてみた。

すると、父が生きていた頃には行き当たらなかった『膠芽腫、レベル４からの復活』という記述を見つけた。見つけられなかったのも当然、その方は父が亡くなる数日前に、膠芽腫を発症したのだ。

その方も父と同じように開頭手術をし、放射線治療、抗がん剤投与などを受け、後に再発。そんな時に出逢った『どんな病気でも直してしまう人』のところへ行き、施術を受けた。発症してから一年経った今でも、再発の兆候が見られないという。

文面を読んでいる限り、おそらく『波動療法』を受けているのではないかと思う。はっきり明記されているわけではないので、私の記憶と照らし合わせた予測でしかないが。

それまでは、膠芽腫になった方のブログをいくつか読み、父と同じような経過を辿るものばかりだし、医療関係のサイトでも『この数十年、治療実績の上がらない病気』と記されていて、膠芽腫は治らないものという考えが根強くあった。

それを父の死後、この方のブログであっけなく覆されてしまった。

また、代替医療としていろいろなものがあるというのも最近知った。それによって絶望視された命が数多く救われている。

私が言いたいのは、助かった事例を父が亡くなった後に知ったことへの妬みや僻みではない。

父が生きている間にそのような情報に出逢わなかったのは、やはり父の寿命だったのだ。そして、それを覚悟し、家族として父との残された時間で最善の行いをしてきた自信がある。我が家に与えられた宿命の中で、最大限に出来ることをしてきた。

だから、後悔は一切ない。

だが、現実に『膠芽腫』を代替医療で克服した人もいる。だから、正に今、余命宣告を受けた方は、いろいろな方法があることを模索していただきたいのだ。必要な情報は、必要な人に必ず与えられる。生きている限り、諦めるのはまだ早い。

亡くなる前の一カ月間のことで、そこまでしてデイサービスに行くかと疑問に思われた方もいるかもしれない。

確かに「父をもう一度、外に連れ出したい」という私の願いは、一見、本人のことを考えないただのエゴだ。だが、愛をもってしたことに変わりない。そうあったことで、この施設に出逢うべくして出逢った。そして、父を突き動かした。

どれか一つでも欠けたら、父も家族も消えていく命を、静かにただ見ていただけの日々になっただろう。もちろん、それが悪いというのではない。しかし、デイを利用し、力の限り楽しみ尽した一カ月、私と父という親子関係において一番相応しい時間を過ごせたと思っている。

２０１３年7月２１日（２）

　病院ではなく、自宅での看取りは昔だったら珍しいことではない。現代でも全く可能なことだ。
　ごく普通の生活を、余命少ない家族と世話をする側の家族が、医療関係者の方の力を借りながら、その家庭なりの日常を過ごし、最期を迎える。特別なことなど何もない。

　私は自分の生活があったので、実質、母だけが父の世話をしていた。母は父よりも七つ年上の八十歳だ。父が倒れるまでは、母は買い物などの家事を父に頼っていた。それが逆転したのだ。それでも出来る。

「在宅で看取るなんて出来ない」

　ある時、そんな声が私の耳に入ってきた。

　出来ないと思ったらやらない方がいい。在宅介護が一般的に推奨されるようになっても、「出来ない」と思った人には事情があるだろうから私は勧めない。

　私も愛情を持てない相手だったり、時間的に余裕が持てなかったら父の時と同じような気持ちで介護することなど出来なかったと思う。それを見栄か義務感で強行したら、世話をする側もされる側も苦痛になり、共倒れする。入院させたり、介護施設に入居させた方が、本人も家族も幸せだと思う。

　在宅介護は、愛情があっても疲れることは覚悟した方がいい。

　でも、疲れたら頼れる体制は整っている。ショートステイだ。予約して利用する施設がほとんどらしいが、緊急入所枠を設けている施設もあるということなので、ケアマネージャーに相談するといい。我が家のように終末だけ利用するのではなく、家族が休憩を取る意味で一、二週間利用したりできる。

　在宅介護をしていると、途中で病状が変化し、家族だけではどうにも対処し切れないことも出てくるだろう。

　痰の吸入など、方法がわかっていてもなかなか出来ない。器官の奥まで管を入れるので、本人にはかなりの苦痛を与える。苦しがる様子を見ながら平然と管を通すのは、よほどの覚悟がないと無理だ。一日中、痰が絡んでいるような病状の場合は、入院してプロに任せた方がいいかもしれ

ない。

　時間にも他の人の目にも縛られない『在宅介護』。

　そして、病院ではなく『自宅やそれに近い場所で看取る』ということ。

　我が家の場合は、父の病状、母の意思、その環境を整えてくださった関係者の方々の存在により可能となった。

　素敵な、かけがえのない日々に感謝の想いでいっぱいである。

たなかひまわり